

薄い
桃色の
かたまり

作
岩松
了

暗い中に人たちの声。「あっちだ！」

「線路の方か!?」「ちがう！ 山の方だ！」

「見ろ、血だ」「ホラ、こっちだ！」

……見えてくるその人たち。

何者かを追って走り去る。

が、一人だけそこに残って他の者を見送った人——ハタヤマ

(男)。

そして、そのハタヤマを追ってきた感じのイド(男)。

イド ああ、よかった。そのまま帰られたらどうしようかと思ってたんですよ。

ハタヤマ いえ、ホントにもう……。

イド お礼を言いたいです。それがみんなの気持ちなんです。どうぞちょっとした時間だけでも。

ハタヤマ ハア……。

イド あなたをお連れしないと私が責められます。

ハタヤマ じゃあ、ホントにちよつとだけ。

イド

ありがとうございます！ じゃあ、みんなに伝えます。

イド、去る。

つづいて行こうとしたハタヤマ、或る気配に振り向く。

と、暗い闇の中に、動物の影。

イノシシだ。じっとハタヤマを見ているようだ。

ハタヤマ

……何をしたかわかってるのか？……そう、そう、それがおまえらのやり方だな……私に何の関係がある？ って顔するんだ……ちがうか？ ちがうのか？ それとも、自分がやったことに呆然としているのか？（イノシシが動く）ん？ どこをやられた？ 足か？ 胸か？ ……オレだって無キズじゃないぞ……見ろ、おまえが引きちぎったんだ……ここは今にアザになる……お気に入りのシャツだったんだよ……恋人にもらった……。

イノシシはゆっくり闇の中に歩いてゆく。

ハタヤマ おい、どこへ行く！

ハタヤマは、それを追うが、背後に、自分がイノシシから救った家族が見えた。

ハタヤマ (それを見て) ……。

その家の中に歩いてゆく――。

1. 添田家

未だ災害のあとが生々しい家の中。

添田家は、一時避難を余儀なくされてるが、やがて帰還するために、少しずつ、家の修復をしようとしていた。が、家人がいない時に、動物たちが、とりわけ、イノシシが我がもの顔に家への出入りをくり返すという事態になっていた。

今、奥の部屋では、イノシシに襲われた添田家の働き頭の長男（学）が看病されている。その学をイノシシから守ってあげたのがハタヤマだったのだ。

集まっているのは、復興に尽力するとともに添田家を励ます人たちだ。

イド ハタヤマさん、こっちにどうぞ。

ハタヤマ ハイ。

クボ 道子さん、お茶を。

道子 あ、ハイ。

道子、ハタヤマにお茶を入れてあげる。

イドは、奥の部屋を見るために、その部屋の入り口のところで行く。

ニシ　ハタヤマさんでいいんですたっけ？

ハタヤマ　あ、ハイ。ハタヤマです。

ニシ　ホントにねえ、ハタヤマさんがいらっしやらなかったら、どういふことになっていたか……。

道子　いたって役に立たない人は役に立たないわけですからね。

クボ　そのとおり。

ハタヤマ　私も無我夢中だったもので……。

ニシ　そうでしょ、そうでしょ。

サカイ　だけど、動物もあんな目をするんですね。初めて見ました。イノシシのあんな目。

道子　あんな目って？

サカイ　おびえたような目ですよ。最後、ハタヤマさん見ながら、あとずさつてたでしょう。

クボ あと、あの時の（イノシシを威嚇するための悲鳴に近い）あのハタヤ

マさんのヒーッ！ って声！

ハタヤマ （照れたように）いや、あれは……。

道子 あの時、ハタヤマさんもまた動物だった。なんてね。ホホホ。

ハタヤマ （破れたシャツを気にする）

道子 （ので）あ、それ、お脱ぎになって。つくろった方がいいわ。あ、全部とは言わないから。脱いで脱いで。ホホホ。

ハタヤマ あ……。

ハタヤマ、シャツを脱ぐ。

イドが皆の方に戻ってくる。

サカイ どうですか？

イド だいぶ落ち着いたみたいです。

他の者 よかった、よかった。

奥の部屋から出てくる添田良二。

クボ だいぶ落ち着いてきましたか。

添田 ハイ、おかげさまで……（すぐに台所の方を気にして）何やってんだ、あいつ。

イド 添田さん、ハタヤマさん、いて下さってるんだよ。

添田 ええ、ハイ。（ハタヤマの前で手をついて）このたびは、ホントに！ありがとうございます！ハタヤマさん通りかかって下さらなければ、どうなっていたか。

ハタヤマ いやもう、頭あげて下さい。

イド ハタヤマさん、時間がないんだってさ。

添田 そう、それお聞きしてるから……（また台所の方を気にして）おい！まだか！お茶しか出てないんだぞ！

ハタヤマ すいませんホントに。時間がなくなつて……。

添田 いやいや、そうおっしゃらずに……めしあがつって下さい。女房のパエリア、意外といけるんです、これが。

クボ 学くん、寝てるの？

添田 いや、目はあいてる。

クボ そう。

クボ、奥の部屋に行く。

つづいて道子も。

台所から添田の妻、真佐子が顔を出す。

添田 何やってんだよ！ ハタヤマさん、時間がないっておっしゃってんだ

よ！

真佐子 やってますよ、今！

添田 お茶しか出てないんだぞ！

真佐子 精一杯やってるんです。

添田 聞きあきたよ、お前の精一杯！

真佐子、引っこむ。

イド 添田さん、奥さん一生懸命やってるよ。

添田 一生懸命問題にするんだったら、みんな一生懸命だって話ですよ。

イド いやいや、だって、学くんのことだって心配だろうしさ。

ハタヤマ 私、ホントにもうそろそろ……。

添田 (ハタヤマの体をつかんで) 食べてつてください、あいつのパエリ

ア！ ね、私どもに出来ることは、それくらいしかないんです！

ハタヤマ それ、ホント、お気持ちだけで。

添田 気持ちだなんて、そんな見えないものが何になりますか！ ハタヤマ

さんが、わかって欲しいんです。私どもがどんなに感謝しているのか！
学が、息子が今、倒れでもしたら、動けなくなりでもしたら、この家
に帰還することにも意味がなくなる！ 息子には、この添田家を守っ
ていってもらわなきゃなんのです！ イノシシなんぞに荒らされて
たまるもんですか！

ニシ 私からもお願いしますよ。添田さんの気持ちをくんでやってください。
ですから、気持ちはいただと。

イド ニシさん、添田さん、気持ちは見えないから、パエリアをとって、そう

おっしゃってるんだから。

ニシ いや、私もそのこと言ってるんですよ。

イド でも今、気持ちをとって。

ニシ 気持ちのパエリアじゃないですか！

イド ああ……。

ニシ そうでしよう!?

添田 (泣く) ……うらみのある奴にやられたのならまだあきらめもつきま
す。けど、私どもがうらまれるスジ合いは何もない! ましてや、う
らむことの意味さえわからないイノシシにこんな目に遭わされて!

イド わかりますかハタヤマさん、添田さんは、もちろん私たちも、国をう
らむことはやめよう。そう決めたんです。無力感の中であがきつづ
けるのはやめにしようって! だから自分たちの力で、何とか復興の手
がかりを得よう! そして一歩進んで、二歩進んで、その実感を
共に感じていこうって!

添田 なぜイノシシの奴めに邪魔されなきゃならんのですか! ここは私の
家なんだ! ここで! 家族で暮らすために! 私の父の父が建てた
家なんですよ!

ニシ 大丈夫だよ添田さん、イノシシだって少しずつわかってくるよ。ああ
ここは人間様が暮らすための家なのかアって……。

添田 息子に向かってきたんですよ、そのイノシシが!

ニシ だから、これから! こうやって私たちが片づけ、整理して、ひんぱ
んに帰って掃除しつづけければ、奴らもわかってくるって。

添田 わかってくるって、ニシさん、相手は動物だよ。わかるのかよ！

ニシ わかってくるって！ 自分たちがいる場所じゃないってことは。

添田 ……。

ニシ だって奴らは学んできたわけでしょ。歴史の流れの中で。自分たちが

いるべき場所ってものをさ。だから山で暮らしてるわけじゃない！
通常のイノシシとしてさ！

添田 通常のイノシシ！ 何だそりゃ！

急に、お互いに、ハタヤマの前で言い合いになっていること
を恥じたように。

添田 ごめん、ニシさん。

ニシ (むしろ添田をハグして) ……添田さん……。

イド (ハタヤマに) 家ですよ。自分たちの家！ 自分たちの家に住むって
ことの意味！

ハタヤマ え？

イド 家が奪われるってことは、寛容さを失くしていくってことなんです！

私たちは言い合いをしてはそう結論している！

サカイ どうだった？

道子 だいぶ顔色もよくなってきたわ。

いつの間にか奥の部屋から戻っている道子。

イド あ、そう！

道子 お礼が言いたいって起きあがろうとするから、大丈夫、ハタヤマさんはまだいらっしやいますよって言ったんです。

ハタヤマ (腕時計を見て) あ、もうこんな時間か……。

ニシ あ、なんかいいにおいが……。

添田は台所の方に向かって。

添田 真佐子！ まだかよ！ (皿に盛ってある御新香のようなものを受け取

って) え？ つなぎ!? そういうこっちゃねえだろ！

と、それを放り投げた。

イド 添田さん、奥さん、急いでるつて。ホラ、いいにおいしてきたしき！

添田 口ごたえするのか!? (真佐子になぐりかかろうとする)

イド 添田さん！

クボ (出てきて) ハタヤマさん、学くんがお礼を言いたいつて。

ハタヤマ あ、いや、もうホントに……。

クボ ちよつとだけでも……。

道子 (奥の部屋に) あ、学くん！ そのまま！ 動かなくていいよ！ 今、

ハタヤマさんが！

ハタヤマ じゃあ、ちよつと。

ハタヤマ、奥の部屋へ——。

ニシ (添田に) ハタヤマさん、いらっしやるから……。

添田 そういうことじゃないんだよニシさん……何に限らずってことなんだ

よ……人つてのは、気持ちが出るわけでしょ、外に！ その外に出る

ものを問題にしてるんだよ。私は！（真佐子の方を見て）ホラ、その目が！（となぐりかかろうとする）

ニシ （のを）ちよつと、ちよつと！

道子 私が。

道子が、ここは任せてとばかりに、台所の真佐子の方へ行く。

ニシ、イドは、添田をなぐさめようとしている。

クボは、添田も気になるが学の方も気になるといった風で。

イド 急いでらっしゃるんだな。

クボ うん。

イド 今日は線路工事の現場の方にも顔を出してきたっておっしゃってた……工事はつづけるってみんなの意見も聞いてきたって。

クボ その報告も含めてのことだろ。その、今から復興本社の方に戻らなきゃならないっていうのは。

イド うん……。

サカイ ハタヤマさんも、つらい立場さ。

ニシ　　そうそう。

道子が台所から出てきて、自分のバッグからバンドエイドを出し、それを持って、また台所へ。

クボ　　何？ バンドエイド？
サカイ　　だったね。

ハタヤマが出てきて。

ハタヤマ　　すいません、じゃあ私、これで――。

添田　　え？

イド　　添田さん、これ以上、おひきとめしても……。

ニシ　　そうだね。ハタヤマさん、まだ仕事も残ってらっしゃるし。

添田　　いやでも、パエリアが――。

クボ　　出来ても、ホラ、食べる時間も考えれば、また20分30分はかかるし。
添田　　おいしいんですよ、ホントに。あいつのパエリアは！

イド いや、おいしいおいしくないは、また別の問題でさ。
ニシ ハタヤマさん……（どうぞもう）。

促されるようにハタヤマが立つと、
ほぼ全身包帯の学が出てくる。

イド 学くん！

添田 学、おまえ……。

学 （痛々しいが）ハタヤマさんは……（とさがす風）……あれ、ハタヤマさんは……。

クボ 寝てなよ、学くん！

学 もっと話がしたいんだ。

イド もう仕事に戻られるから。

ハタヤマ 失礼します。

イド オレ、ちよつと。

ハタヤマ、去る。

イドは、それについてゆく。

学

話がしたいんだよ……敵じゃないって言いたいんだ……！

血相かえて台所にかけてこむ添田。

道子の声

添田さん！ やめて！

添田の声

手をどけろ！

学は、奥の部屋に引つ込む。

おびえたように出てくる真佐子。

追ってきた添田。

添田

帰ってしまわれたよ！ おまえが遅いから！ おまえのパエリアが遅

いから！

道子

(出てきて、添田をとめ) 添田さん！

添田

感謝の気持ちも伝えられないのか！ オレは、あのハタヤマさんに！

また真佐子におそいかかろうとする添田をとめるクボとニシ。
その間に台所とは別の方へ逃げてゆく真佐子。

クボ 添田さん、伝わったよ。感謝の気持ちは！

ニシ うん、ハタヤマさん、恐縮してらした！ だから、ね！

添田 あの、のろま女！

道子 言わないで、そんなこと！ もうほとんど出来てるのよ、パエリア！

クボ そうだよ、持っていけばいいじゃない。復興本社の方にさ。

ニシ そうそう、鍋ごと持ってもいいよ。な。

クボ おれたち、持って行くし。な。

ニシ 持ってく！ 持ってく！

添田 ……。

クボ 大丈夫、伝わったって。

ニシ かえってよかったってことない？ ホラ、わざわざパエリア持って追

っかけてきたってことで、感謝の気持ちは倍になって。

クボ なるほど、なるほど。倍になってね。

添田 復興本社に持ったたら、他の奴も食うじゃないか……オレは、あの

男に食べて欲しかったんだよ……。

クボ　あの男って……それじゃ感謝の気持ちが出ない！　ハハハ。

また学が出てきて。

学　母さんは……？

添田　おまえは、横になってろ！

学　母さんは！

道子　大丈夫ですよ、私が――。

道子、学を寝かせに行く。

添田　あれ、イドさんは？

ニシ　うん、ハタヤマさん送りに行った。

クボ　（パエリアが）ああ、いいにおいだ。

添田　あのバカが……。　（と真佐子のこと）

ニシ　またそんなこと言って！　ダメだよ、添田さん、奥さん、一生懸命や

ってんだから。

添田 わかっているよ、そんなことあ。

ニシ ホントにもう！

クボ バンドエイドはってたよ、ここに。

ニシ なんか、かわいかったね。

クボ うん、変に色っぽいよね。主婦のここにバンドエイド。

添田 (鼻で笑う) ……色っぽかねえよ……。

クボ 知らぬは亭主ばかりなりってか？

クボとニシとサカイ、笑う。

クボ 聞こえてた？

サカイ 聞こえてた。

神妙な表情で出てきた道子。

クボ どうしたの？

道子 ……イドさん、遅くない？
クボ そう？

道子、黙ってイドが行った方へ行く。

ニシ (それを) 何？
クボ (首をかしげる) ……どれ、学くん——。

クボ、学のところへ行く。

添田 (不意に) 真佐子……。

妻が行った方へ走ってゆく添田。

ニシ ……。

夜空を雲が流れた——。

2. 丘の上のバカ

ひとりの若い男が丘の上に立っている。

若い男

……けむりが見えたんだ……あの海の方に……何かの破片が飛び散るのも見えた……けむりはこっちの方にふくらむようにして流れていった。こっち、北の方だな……いつもならあそこの線路を列車が走ってくる時間だったよ……ああ、わかっていたさ、あの線路も駅も流されて、もう列車が走ってくるところなんか見えないって……でもボクは見ていたよ。恋人が東京からボクに会いに来るはずだったからね……みんな今日は列車なんか走らないって、まるでボクがそのことをわかってないみたいに言ったけど、ボクはわかっていたんだよ……。

小型のナイフを取り出して、近くの木に何かしるしをつける
若い男。

若い男

……フフフ……日記みたいなもんさ……今日もここからキミが乗って

くるはずだった列車が走るのを見に来たよって……つまり恋人に見せるためのね……「おい、若けえの」っておじさんたちは言ったよ……「こんなところにいるとイノシシにやられるぞ」って……ボクが忠告ありがとうっていう風に手をあげたら、おじさんたちは「ここやられてるな」って（頭を示しながら）ささやきながらそこを降りていった……ボクはこいつ（木）にも言ったよ。そうなのか？ オレはここをやられてるのかって……でもホントは自分でも少しそう思ってたところでもあったんだ……ボクはここをやられてるのかもしれないって……どうしてかっていうと……色が、見えるものの色が……ないんだ……なくなっているんだ……前の日にはまだ薄く見えていた色が、あのけむりを見た時から……ただの白と黒にしか見えない……そのことに気づいた時、ボクは思わずつぶやいていたよ「おじいちゃんの写真だ」って……海も空も青くないし通りにある信号も点滅がわかるだけなんだ……でも、それってここをやられてることの証拠になるのか？ だって「おじいちゃんの写真だ」ってつぶやいた時「ホントだな」って、もう一人のボクは笑ったくらいなんだぜ……（太陽を見て）……ああ、またこの時間か……あの日は丸一日ここにいたっけな……そう、

そしてあのけむりを見たんだ……（下を見て）ん？ 誰かくる……もう来ないでくれとあの人には言ったはずだ……いや、ちがう。あの足音は……。

近くの木のかげに隠れる若い男。

やってきたのは道子。

道子

あれ……いない……来てないのかな、今日は……（あたりを捜すが、眼下に目をやって）……思い出してしまうよ、こんなところにいると……海、堤防、道、家……ああ、車が走ってる……。

道子は、またあたりを見まわすと、

紙キレにボールペンで何かを書き始めるが、

道子

ああ、こんなこと書いてる場合じゃない！（と紙キレをそこらに捨て、風呂敷包みを）……ここに置いておくからね。

そこに置き、丘をおりてゆく。

若い男は出てきて、その紙キレを拾い、

若い男

(読んで) あのね、えーとね……何だよ！ こんな意味のわかんねえもんちゃんとゴミ箱に捨てろよ！

紙キレを捨て、そして風呂敷包みを開けると、弁当のような物が入っている。

若い男

パエリア……。

3. 列車と女たち

走る列車。

女ばかり20人（青木、井本、上田、越智、加藤、木島、久保、小池、田宮、土屋、寺島、戸田、中井、西川、沼田、根本、野口、長谷川、平田、福田）。

青木 どうしてそういう芝居が出来るのかしらねえ！

井本 芝居じゃないわよ。芝居じゃないんでしょ？

上田 私に聞いている？

井本 いや、誰でもいいけど。ねえ、ねえ。（と他の者にも問いかける）

越智 この人（青木）はね、何でもかんでも疑わなきゃ気がすまない人なの。

青木 ちよつと待つてよ。芝居でしょ、どう考えたって。結婚して40年も50年もたつてるのに花束贈る!? 女房に！ 旦那が！

加藤 だから、贈るって話をしてるんでしょ？ この人（久保）は！

木島 しあわせよ、久保さんは。ねえ。

久保 だから、しあわせとか、そういうこと言ってるんじゃないのよ。習慣

になつてゐるだけのこと！

井本 だからしあわせなんでしょ!? 白状しなさい！

久保 んもう！

木島 ホラホラ。私も言ってみたいわ。「んもう！」

久保 だいたい青木さん、なんで言い切れるの、芝居だって。そっちの方が
逆に気になる！

越智 さんざん痛めつけられてきたからよ。男に！

青木 あんたに言われたかないわよ！

上田 って言うか、私もそんなことされたらちよつと背すじ寒くなるかも。

井本 そんなことって？

上田 だから、誕生日だ結婚記念日だとか言つて花なんか差し出されたら。

越智 ありゃ！

上田 お金くれるんだつたらまだわかるけど……花でしょ。

口々に、「お金！」の声。

戸田 まあ、その意見もわかるっちゃわかる。

木島 (久保に) ホラ、何とか言わなきゃ!

久保 何がよ。

木島 言い出しっぺなんだから久保さん。

久保 私は言ったんじゃない。言わされただけよ。「おたくはどうなのよ」とか言われて!

田宮 嘘って手もあったんじゃないの? 何もホントのこと言わなかったって。

久保 嘘までついて、私、何か得する?

ここに三人の女(坂口、篠原、鈴木)が、戻ってきた。

坂口 ハイ、エサもらってきました。受け取って、受け取って!

篠原 向こうはほとんど居眠りタイム。

土屋 男は、だらしない!

鈴木 なに盛りあがってたんですか?

福田 久保さんの、のろけ話よ。

鈴木 えー、のろけ話! どんな、どんな?

久保 もう、いっての！

坂口 あれ？ あの子は？ ミドリちゃん。

小池 お手洗い？

木島 かな。「ちよっと」って向こうに行ったから。

越智 おっ、都こんぶ！

三人も席につく。

それぞれにおやつ漁ったりして――。

急に大人しくなった感のある女たち。

加藤 え？ お手洗い？

木島 じゃないの？

坂口 「ちよっと」って？

木島 言ったわよね。

越智 うん。

坂口 こっちに？（とそっちを見る）

西川 何考えてんのよ。

坂口 変な気おこされたらたまんないからね。

寺島 何よ、変な気って。

坂口 変な気よ。

寺島 この人は……！

坂口 だって気にならなかった？ あの時おり見せる暗い表情っていうの？

田宮 むしろ明るかったんじゃない？

鈴木 そうよ。手品だってやってみせてくれた。

坂口 まあ手品はアレとしてもさ。

久保 (田宮に) その明るかったのが、芝居だったらどうするのって話

じゃないんですか？

田宮 わ、あんなこと言ってる。

久保 だって…… (戸田に) ねえ。

戸田 ハイ、ハイ、ハイ。

田宮 ハイハイハイじゃないの！ いい？ 私が明るいって言うのは、ヘラ

ヘラ笑ってるって意味じゃないわよ。苦労かけるねって花束さし出す

男の言い訳のようなへつらいとはちがつて——。

久保 何よそれ。

青木 (制して) いやいや、おたくのことじゃない。久保さんちのことじゃありません！ 一般論、一般論。そうでしょ？

田宮 もちろん。

久保 一般論？

青木 誰か久保さんつかまえてて。

久保 (誰かつかまえようとするのを) 放してよ！

青木 この人(田宮)が明るいつて言うのは、希望のことよ。あのミドリちゃん(胸)にある希望。それを私たちが感じれば、おのずから、その表情は明るいものと感じられるはずだつて。そのことを言つてるの！

田宮 (久保に) ごめん久保さん。花束の例えはちよつと変えるから。ええつと。苦労かけるねつて——。いや、まるごと変えた方がいいわね。

青木 田宮さん、それ今じゃなくていいから。

田宮 そ、そう？

青木 いや、坂口さんが暗い表情がどうたら言うから、ここはちゃんと正論言つとかなきゃと思つてさ。

木島 うん、わかる。わかる。

篠原 私、ちょっと見て来ましようか？

鈴木 え、便所に？

篠原 ドアまでは開けないけど。

木島 戻ってくるって。

井本 希望。そうね、私たちがこうやって、この列車であの子に会えたのも何かの縁だっと思って思えてくる……。

木島 ホント、ホント。

加藤 でも、どうして急に連絡がとれなくなったんだろう。

木島 何がよ。

加藤 だから、その恋人とよ……だって、もう6年も経ってるのよ。

上田 うん……それよねえ……愛想つかされたのよとも言にくいでしょ。

中井 そうとばかりも言えないかもしれないね。

上田 そう、そう。こたえることがあの子にとってつらいことだったらどうしようって思うと――。

中井 聞きにくい。確かに。

篠原 私、ちょっと見て来ますよ。

坂口 ホントは聞いて欲しいってことない？

加藤 その恋人とのこと？

坂口 うん、だって自分からしゃべるのもちよつと気がひけるってところある

でしょ。ホラ、私たちって……。

戸田 私たち……が、何？

坂口 言っちゃナンだけど、盛りを過ぎた女たちなわけでしょ。

皆、口々に「えー」「そんなことない」などと、ざわめく。

坂口 いやいや、私たちがどう思おうと、若い人から見ればそういうことになるわよ。

西川 若い人から見ればって、そういう言葉使っちゃダメよ。

坂口 そう？

西川 うん、ダメ。絶対ダメ。

坂口 じゃあ、撤回する？ しようか？ ハイ、した！

西川 て言うか、震災がからむと、変にイタイとこほじくり返すな、みたいな、こう、無用な倫理観がはびこってさ。あれ、逆に迷惑よね。

ガタンと列車が音をたててゆれる。

小池 (ので) 何？

西川 震災なんて……震災なんて誰が悪いわけでもないのにさ。

青木 そういう言い方すれば、そりゃ確かにそうよ。

加藤 え、今の、わかんない。

越智 (篠原に) 行ってきなさいよ。

篠原 うん、今――。

篠原、行こうとすると、

そこにミドリが立っていて。

篠原 今、さがしに行こうとしてたのよ。

ミドリ ごめんなさい。

坂口 どこ行ってたの？

ミドリ ええ、ちょっとお手洗いに。

「ホラ」「やっぱりね」などと口々に言う女たち。

木島 今、そうじゃないんじゃないかって噂も乱れとんでたのよ。

ミドリ そうじゃない……って？

木島 だから、便所に行ったんじゃないんじゃないかって。

ミドリ そうじゃないんじゃないです。

木島 お、ホホホホ。素敵。

根本 (鈴木に) ホラ、通してあげなさいよ。短い脚！

鈴木 あ……。 (とミドリを通してあげる)

ミドリ ありがとうございます。 (席に着く)

微妙にミドリに気をつかった感じの女たち。

青木 あの、その、あれよ……あなたがこれから会いに行くというその恋人

のことを、もうちょつと聞きたいなって、そんなことも言ってたのよ。
ねえ、ねえ。

上田 そう、そう。私たちに出来ないことがないとも限らないもの。ねえ、

ねえ。

越智　むしろ、協力出来るものならしたいって話になってなかった？　ねえ、

ねえ。

小池　あ、私？　うん、なった。と思う。

越智　何よこの人、寝てるの？

小池　寝てないわよ。考えごとしてたのよ。

越智　何、考えごとって。

小池　ちよっと自分のトシがわかんなくなったから。いくつだっけなって

……。

越智　この人ってば！　ありうる!?

小池　さっき若い人って——。

沼田　（小池をさえぎって）聞くけどさ、どうやって探すつもり？　その恋

人を。

ミドリ　……。

沼田　あの頃二人が待ち合わせた駅に行けば何かわかる。それくらいでしょ。

目算としては。

木島　その駅だって、今はないからね。おまけに、その恋人の名前もわから

ない。

坂口 え、何て呼んでたって？ その恋人のこと。

ミドリ ギイって。

坂口 で、向こうは？ あなたの何を？

ミドリ ジェニーです。

「ギイ」「ジェニー」……何なのそれ、という視線を交わし

合う女たち。

鈴木 ロマンチック！

坂口 どころがよ。そのせいでこんなことになってんじゃないの。言っちゃ悪いけど、バカよ。そんな……。

ミドリ 卒業して社会人になるまでは、って私たち……四月になって桜並木が満開になったら、「ギイ」と「ジェニー」も卒業しようって……。

鈴木 ロマンチック！

越智 (小池に) 聞こえてる？

小池 聞こえてるわよ。ねえ、さっきの手品もう一回、見せて。

越智　それかい！

ミドリは、赤いボールと青いボールを出して、左右の手に握り、閉じて開く。

と、赤と青が入れかわっている。

皆が「おー」っとまた驚く。

「なんで、なんで!？」とタネあかしをせがむ者、さほど興味を示さない者、それぞれ。

鈴木　ギイに教えてもらったんでしょ？

ミドリ　ええ。

鈴木　ロマンチック……！

坂口　いいから！　聞きたいのは、もっところ、他の手がかりよ。

加藤　そう、そう。

青木　避難指示は解除されたけど、駅そのものは今はないのよ。

ミドリ　……。

根本　私たちの町を復興させるために線路の復旧工事を進めてるさなか、行

政の方からストップがかかったの。今のままでいいじゃないか。この海ぞいの線路はなくなっても内陸を迂回すれば事足りるんじゃないかって！

野口

私たちは、なくなった線路を復活させようとしてるのよ……何のための避難解除よ！

長谷川

だから私たちは、こうして東京まで、陳情書を持って行ってきたのよ。わかってもらわなきゃって一心でね。

ミドリが自分のスマホを出している。

戸田

(ので)何？

ミドリ

これが最後のメールなんです。6年前の……。

久保

震災の次の日に恋人から来たっていう？

ミドリ

ええ。

久保

いいの？ 見て。(受け取って)

次から次へメールをまわし読む女たち。

戸田 (読んで) ……避難所にいる人の携帯を借りて打ってます。

ミドリ ええ、本人のがなくなっただか流されたかしたのだと思うんです。

戸田 (つづけて) 私の目の前から色という色がなくなってしまいました。いつもの海に戻った海。昨日までとはちがう町になっている町。私はそのすべての色を知っているはずなのに色が無い……私はいっさいの色彩を奪われたのです……風景が私の目の前で、古い写真のように今を拒絶し「おまえもまた今ではない」と言ってるようなのです……。

青木 色彩を奪われた……。

ミドリ これは誰のことを言ってるんだろうって私は思いました……自分のことでしょうか。いっさいの色彩を奪われたというのは、あの人のことなんでしょうか。

土屋 どういうこと？

ミドリ あの人は自分のことを「私」なんて言うことはなかったし……それに、私たちはあと一ト月もすれば、四月になれば会える、そう言い合っていたんです。だったら――。

土屋 あなたは東京にいたのよね、あの日。だったらわからないわ。わかるはずもないわよ。あの時、私たちがどんなだったか――。

木島 そうよ、目の前で死んでいったのよ。私のお友だちが！ 明日一緒に

買い物に行きましょって言ったたら、歯医者予約があるからゴメン
ねって笑っていた私のお友だちが！

ミドリ いえ、私は……。

青木 そうよ。この人は、ここに書かれてることがわからないって言ってる
んじゃないのよ……そうよね。

ミドリ ええ、この（メールの）中には、あの人もいない、私もいない。そう
思ってたんです。

木島 たいへんだったのよ。あの時は！

ミドリ そんな時だからこそ、私たちはお互いの手を握り合おうとするのでは
ないんですか!? 私が東京にいたから、あのたいへんだった時間を共
に生きなかつたからという理由で私たちの関係そのものを拒絶しよう
としたのでしょうか!? 私は祈りましたあの人の無事を！ ええ、私
には感じられたんです。一人で生きてるんじゃないって感じるために、
あの災害はあったんだって！

青木 （携帯を見て） 3月12日、21時42分。

列車がガタンと音をたて、停車した。
皆、何ごとか？ という反応。

「どうしたの？」 「何？」 「故障？」

止まった列車の外に出てみる者。

別の車両に行ってみようとする者。

やがて、列車の外には男たちの姿も。

越智は、その外にいる者に状況を聞いている。

上田 あとひと駅だっていうのに。

ミドリ (地図を出して) 今、どこですか？

青木 (示して) ここよ。

ミドリ あとひと駅？

上田 ここまでしか行かないの。ここから避難指示区域だったから……だいたい線路ないし……。

井本 (小池に) 寝てる？

小池 起きてるわよ。どうして私にかまうの？

井本 たいへんになればなるほど眠る人だから。

小池 みくびらないで。

井本 みくびるって……みくびってないわよ……むしろ逆よ。

越智 えー!!

皆、越智の声に反応。

上田 どうしたの？

越智 線路にイノシシがいるんだって。

上田 イノシシ？

外にいた男の一人（ナカガワ）が車内に入ってきて。

ナカガワ

どかねえんだ、イノシシが！ テラカワさんは、ありゃ自殺するつもりだって言うんだけど、オラそんなこたねえって言ったんだ。イノシシの奴が自殺しようなんて、そんなこたねえって！ だけどテラカワさんは見たことあるって言うんだ。高い崖っぷちから飛び降りようとしているイノシシを見たことあるって！ だからオラ言ったんだ。そ

りや崖つぶちに立ってただけだろって！ したらテラカワさん言ったよ、イノシシの目から涙が流れてた。それを見たって！ そんなバカな、そりゃ汗だ。高いとこまで走ってきた汗だろ。でなきゃ雨でも降ってるんだろって言ったたら、雨は降ってない。汗もかいてないって！ オラあつたまきて、今は!? 線路でも涙流してるか!? って言ったんだ。そしたらあのウツボじいさん、まずは崖つぶちの涙の一件にケリをつけたいって言って――。

この間に、車内に残っていた者も皆、外に出てゆく。追うようにナカガワも。

ミドリを残して、風景が変わってゆく。

そこは恋人と会ったという駅のようだ。

そのミドリを、列車が停車して、ざわめき始めた頃から見ていた一人の女がいた。

あの添田家の妻、真佐子だ。

4. 色彩を奪われた

真佐子 ええ……ここらあたりが駅舎だった……ちいさな駅だったものね。

ミドリ ……（あなたは）誰？

真佐子 気づかなかった？ さつきからずっと見てたのよ。あなたのこと。

ミドリ ……。

真佐子 警戒してる？ 私のこと。ってことは、警戒するに足る事情があなたの中にあるってことよね。

ミドリ どうして？ 誰だって警戒するんじゃないやありません？ あなたのことがずっと見てたなんて言われたら。

真佐子 そっか、そっか……じゃあ、こう言うべきね。警戒させるに足るものが私の中にある。でしょ？ 添田真佐子。これが私の名前よ……どうしてそんな目で私を見るの？

ミドリ 服が汚れてる………！

真佐子 ああ、これ……急いでパエリアをつくってたら。

ミドリ パエリア？

真佐子 台所もまだちゃんと使えるようにはなっていないの。だから簡易のかま

どで……格闘してたってわけ。

ミドリ
え？

真佐子
避難解除になったのはいいけど、まだたいへんなの。家の中が。

ミドリ
どこにあるんですか、お家は^{うち}。

真佐子
ここからちよつと南に行った、次の駅の、あ、東京から言ったら、一個手前のつてことになるか。その駅のあたりよ。その駅も今はまだないけどね。

ミドリ
このあたりの人たちは？ 帰ってきてるんじゃないんですか？ 1月に避難解除になったはずなんです。

真佐子
わかるわよね。家がなきゃ帰れないのよ。帰っていいって言われても……。

真佐子
でも今に駅が出来るわ。だって線路だけがあって駅がないってことはないもの。

ミドリ
え？ パエリア？

真佐子
何？

ミドリ
パエリアをつくってた？

真佐子
そうよ。何？

ミドリ
いえ……。

真佐子
教えてちょうだい。あなたの恋の話を……言ったでしょ、あなたのことをずっと見ていたって……え？ ギイ？ そう呼んでた？ 恋人のことを。

ミドリ
……。

真佐子
ううん。身におぼえがあるからよ、私にも。

ミドリ
自分たちだけの名前で呼び合ってたことが？

真佐子
そうよ。誰にもわからない、自分たちだけが認め合える世界を二人でつくってゆくもの。そうじゃない？

ミドリ
ええ、「ギイ」って私は呼んだ。そしてあの人は私のことを――。

真佐子
「ジェニー」。

ミドリ
……。 (嬉しそうにうつむく)

真佐子
でも、会えなくなるとすべてが消えてゆくもの。どこにもいなかったことがわかるのよ。ギイもジェニーも。

ミドリ
ええ。笑ったあの人を思い出す。悲しそうだったあの人を思い出す。でもそれは、ギイではなかった……笑ったのも悲しそうだったのも言葉ではないから。笑うことに嘘はつけなかったはずだから。悲しかった

たことに嘘はつけなかったはずだから。だから思い出すあの人はギイ
ではない……。

真佐子

……言葉は闇ぐみ、その向こうに明るく見えているものは何？

ミドリ

……。 (不意に真佐子の首に目がゆく)

真佐子

え？

ミドリ

(その首にある赤紫色の線を) アザになってる……ここ。

真佐子

(少しウロたえるが) 忘れてた……。

マフラーを首に巻く真佐子。

工事の音が聞こえてくる。

ミドリ

(その音の方を見て) ……あの音は？

真佐子

工事の音。少しずつ線路が出来てゆくのよ……。

ミドリ

駅も？ この駅も？

真佐子

ええ。線路は今、私の家の近くまで来ている……。

ミドリ

(じっと真佐子を見ている)

真佐子

(ので) なあに、もう！

ミドリ いえ、何だか……。

真佐子 え？

ミドリ 身に余る親切をされているような気になって……。

真佐子 親切？ 私があなたに？（照れたように）……どうしよう……。

ミドリ （ある場所に立って）あ、このあたり。このあたりが駅のホームでし

た……ホームに立って、あの坂の方を見ると、あのあたりに赤い花が見えました……サザンカの花だよって、あの人が教えてくれました。

真佐子 ……ギイが？

ミドリ ええ。

真佐子 どんな人だった？ あなたのギイは。

ミドリ、はにかんだように、例の赤いボールと青いボールを出し、手品を披露してみせる。

が、真佐子は、キョトンとしている。

真佐子 え？

ミドリ もう一度。

と言って、再びトライするが、

真佐子の反応は同じ。

真佐子 ……。

ミドリ あ、入れかわってるんです。この赤い玉と青い玉が。

真佐子 あ……ハハ……ああ、そうね……赤いのと……。

ミドリ ハイ、青いのが。

真佐子 手品……。

不意にミドリの中で、恋人の「いつさいの色彩が奪われた」というフレーズが渦巻いたのだろう。まじまじと真佐子を見つめた。

その真佐子の後方から男たちが、線路工事をする男たちがあらわれ、真佐子の姿をのみこんでゆく。

ミドリ

え!?

男たちをかきわけるようにして、
ミドリは真佐子を追った。

5. 線路と男たち

夕日が労働した男たちを照らす。

のびる線路の先にはガレキが見える。歩いてきたのは（イド、クボ、ニシ、サカイ、タナカ、コイケ、トクナガ、ナカガワ、テラカワ、タナカ息子、テラカワ息子、トクナガ息子、ニシ息子）の13人。

テラカワ 働いても働いても働き足りないような気がするのはどういいうわけだ？
ナカガワ やり残していることがあまりにも多いからだろう。

トクナガ 邪魔くさいな、時間というものは！

コイケ ああ。時間さえなければ、いつまでだって働いていられる！

テラカワ だけど、そこに立ちほだかるのは、体の疲れというやつだ。気づいてるか？ オレたちみんなフラフラだぞ。

タナカ どうする？ 飲みに行くか？

なぜかみんな、ヘラヘラ笑う。

テラカワ 気づいてるか？ オレたちや今、笑ってるぞ。

ニ シ テラカワさん、あんたいつもそうやって！

テラカワ 何？

ニ シ いちいち確認するのは、悪いクセだよ。

テラカワ 確認してるわけじゃない。わかっておきたいだけさ。

ニ シ わかって何になる？ それが。笑ってる、それでいいじゃないか。

テラカワ だけど、笑ってるつもりもないのに笑ってたらどうするんだ！ 事ことだぞ！

サカイ まあまあ。テラカワさんはそういう人。それでいいじゃないか。

ク ボ そうそう。それでひっかかった女も二人や三人はいただろうさ。

ニ シ わかっておきたいって言って？

ク ボ うん、「今、ボクたちは恋をしてるね。わかってる？」とか言っ

……（テラカワに）だろ？

テラカワ 言わないよ、そんなこと。

タナカ どうするの？ 飲みに行くの？……飲みにさあ！

今度は、みんな笑わない。

むしろ、考えてる風で。

彼らが歩いてきた方にのびている線路。

はからずもその線路をみんなが見て。

自分たちの労働のあとに、それぞれが「……」。

イド 無駄になるのか。オレたちの苦勞は。

コイケ ならないよ。なるもんか。この線路を列車が走るんだ。以前のように。

ナカガワ ああ、ハタヤマさんが頑張ってくれてるじゃないか。

トクナガ息子 でも、陳情書に対する回答が未だにないってことは……。

コイケ トクナガくん、前を見よう！

ナカガワ そうだよ。イドさんも！ 無駄なんて言葉を使わないでくれよ。

イド いや、でも……。

コイケ 見ろよ、この線路。オレたちの血と汗の結晶じゃないか。

イド コイケさん、血は余計。

コイケ そうか、じゃあ言い直すよ。汗と汗の結晶だ。

イド ハハハ。

他の者も笑う。

そして、なぜかタナカに群がってイジる。

クボ まだ考えてるのか、この飲み助が！
タナカ バーン！（と、指鉄砲でクボを撃つ）

今度はテラカワをイジって。

クボ わかってるぞォ、オレたちや今、笑ってる！ ハハハ。

踊りだした男たち。

女たちが出てくる。

女たちも踊る。

夕日が沈む。

急に踊りやめた彼ら――。

イド ……今日で何日目だ。添田さんが来なくなってから。

テラカワ　もう、かれこれ一ト月だ。

ナカガワ　相変わらずなのか？

トクナガ息子　相変わらずだ。ただ学くんのキズはだいぶ小さくなった。そうだろ？

道子　一進一退ってとこよ。

ナカガワ　行っただら、お見舞いに。

トクナガ息子　行っただけど会えないんだ。

サカイ　誰に？

トクナガ息子　学くんにだよ。添田さんが会わせまいとするんだ。

サカイ　どうして？

トクナガ息子　オレに聞くなよ。

コイケ　ケモノくさいって言うんだ。

サカイ　誰が？

添田さんがだよ。家の中がケモノくさいから、入って欲しくないって言うんだ。家の中に！

テラカワ　そういう問題じゃないだろ！　オレたちは何のために、こつやつて線

路を復旧させるために毎日働いてるんだ！

コイケ　オレに言わないでくれよ。

テラカワ

添田さんちの帰還が、そのままオレたちの復興の旗印でもあったんだろ!?

コイケ

だけど添田さん、奥さんのこともあるし――。

皆が、沈痛なものに包まれた。

女たちは、長いテーブルを出し、男たちのために、労働のあとのくつろぎの場をセッティングしているのであるが……。

道子

時間が必要よ……添田さん……待つてあげた方がいいわ。

イド

だけど、早く復帰してもらわないと。オレたちの士気に影響する……。

クボ

添田さんもわかってるはずだろうにな。オレたちの士気がおちたら、あいつらの思うツボだってことは。

ニシ

どうだろう。今夜あたり、みんなで、添田さんちに出向いて話をしてみるってのは。

クボ

そうだな。

イド

今日は、ハタヤマさんは？

井本

顔を出すっておっしゃってたわ。

それぞれにくつろぐような具合で。

ク　ボ　　だけど、オレは奥さんもつらかったと思うんだよ。

テラカワ　奥さん？

ク　ボ　　添田さんの、真佐子さんだよ。

久　保　　どうしてよ。

タナカ　　おつ、これは奥さまからの突っこみ。

ク　ボ　　添田さん、キビしかったしさ。奥さんに対して、人前で！ オレなんかも、そばにいて、なにもそこまですてくくらいキツイこと言うしさ。なあ。

ニ　シ　　うん。何だったんだろうね、あれは。

久　保　　二人きりの時には、どうだったかわからないじゃない。

ク　ボ　　そりゃわからないよ。わからないけど……二人きりだからって真逆ってわけにゃいかねえと思うぜ。

イ　ド　　添田さんなりのダンディズムだとオレは思うけどね。

青　木　　ダンディズム！

イ　ド　　おいおい、その言い方！

青木 何？

イド 「ダンディズム！」って。オレ何か悪いこと言ったか？

テラカワ息子 いいから。え、どういうこと？

イド そういうもんでしょ、男って。夫婦だからって人前でデレデレしてたら失礼を通りこして不愉快だっていうさ……だから、人前での礼儀みたいなもんでさ。

青木 奥さんにキツくあたることか？

イド キツくあたるって言うか、デレデレしないことがさ。

青木 デレデレしなきゃいいじゃない。

イド デレデレって、まあ言葉がアレだけど……要するに、何て言うかな……スジを通すって言うかさ。

青木 何よ、スジって。

イド つっかかるね。

青木 わけのわかんないことを言うからよ。

ニシ息子 (割って入るようにして) 大きく言えば、世界平和のためよね。

木島 よっ！ 大卒！

福田 四大！

篠原 龍谷大学！

イド ん？ それは？

ニシ息子 個のつながりを強くすれば、おのずから他を排斥するって方向に行くよね、人間の社会ってものはさ。だからその結果として他を排斥するってことになるってわかってるから、個のつながりになるべく冷淡でいようっていうさ……。

イド なるほどなるほど。

木島 世間体を気にするってだけのことでしょ？

ニシ息子 いや、世間体を気にするって、そんな悪し様に言うけど、大事なことだと思っぜ。世間体を気にするってことはさ。

男たち、「そう、そう」などと賛同する者が多い。

コイケ ま、美德として勘定してもらわなきゃってことだよ。世間体を気にするってことは。

田宮 だけど、クボさんはそばにいてもキツかったっておっしゃってるじゃない。迷惑がかかってるわけでしょ？

クボ いや、迷惑っていうか……。

田宮 どっち、どっち、どっち！

久保 (田宮の体がぶつかって) 痛い！

田宮 (久保に) ごめんなさいね。私、ムキになってる。

久保 (曖昧に笑って) ……。

ここに「あ、ハタヤマさん」「どうぞ、どうぞ」などの声が

して、迎えようとする彼ら。

ハタヤマが来た。

ハタヤマ お疲れさまです！ あ、どうぞ、そのまま。

皆、ハタヤマの言葉を待つような具合。

ハタヤマ タナカさん、どうですか調子は？

タナカ え、オレ？ なんでオレよ？

ハタヤマ こないだはホラ、肩が痛いとかおっしゃってたじゃないですか。

タナカ 肩？ 痛いよ。だけどそんなもん。

コイケ 飲みや治るって？

笑い、ざわめく彼ら。

ハタヤマ 今も少しずつのびてゆく線路、見てきました！ 昨日より今日、今日

より明日、まさに皆さんの復興への願いが、ああして一本ののびてゆく線路となって現前化しているのだと思うと、私ども、もっと頑張らねば、という気持ちになってきます！ 業者の方からも、皆さんの働きぶりに対する称賛の声が多数聞こえてきます！

イ ド 足手まといだとか言ってるねえか？

ハタヤマ 言っていない、言っていない。そんなことは言ってません。

コイケ となり声でもってケツひっぱたかれるからさ、時々。

また笑う彼ら。

トクナガ でもアレ、けっこうシビれるよな。

コイケ　　そうそう、ダメな時はどなつてくれた方がこつちも燃えるしな。

サカイ　　燃える、燃える。

タナカ　　オラ、優しくされた方がいいな。

他の者　　コラ！

青木　　ハタヤマさん！ 陳情書に対する回答がまだいただけませんが、

これは……。

ハタヤマ　　ハア……。

井本　　まさか突然中止なんてことにはならないわよね。

ハタヤマ　　もちろん……そんなことには……。

上田　　何？ 何かあるの？

ハタヤマ　　……。

越智　　正直に言つて下さい！

ハタヤマ　　……。

加藤　　ハタヤマさん？

ハタヤマ　　……まずボク個人の意見を言わせて下さい……ええ、ボク個人の……

同じ会社とは言いながら東京本社とわれわれ復興本社の間には若干の、
いえ、大いなるズレがあると言わざるをえません……東京本社の方で

今問題になっているのは、出没するイノシシの問題です。線路よりもイノシシ退治の方が先に解決すべき問題ではないのか、という意見が大勢を占めつつあるのです。

それに対する抗議の声があがる。

ハタヤマ

（のを制して）いえ、鉄道が復旧し、帰還する人たちが、それぞれに住居を構え鉄道を利用するようになれば、イノシシは、おのずから山に帰ってゆく！ 私は、私どもは、そう信じています！ それは皆さんも同じ考えのはず！ そうですよね？

「もちろんだ」の声。

ハタヤマ

正直に申しまして、今も、線路工事の業者の方に東京本社から圧力がかかっている状況です。ええ、予算の問題になってきます。予算が、復興予算というものが大幅に削られるということになれば――。

抗議の声にかきけされるハタヤマの声。

ハタヤマ

(さらに制して)ただ皆さん！　こわいのは、ここへ来て、イノシシたちが意思を持ちはじめているのではないかということです。つまり、自分たちの行動が、われわれ人間にどんな影響を与えるのかを知ってきているのではないかと言うことです。

テラカワ

どんな意思なんだ。ハタヤマさん、それはどんな意思なんだ！

ハタヤマ

わかりません！　当初はもちろん自分たちの生活圏を守りたいという、いわば動物としての本能をのみ感じたのに、今や、われわれが復興のために努力をつづけているのだということを知っているのではないか、そう思えるのです！

トクナガ

どういうことなんだ！　もっと詳しく言ってくれ！

ハタヤマ

要するに、彼らは、イノシシたちは、復興を望んでいるのか、あるいはそれを阻止しようとしているのか、そのことが判然としなくなったということですよ。

ナカガワ

邪魔しようとしてるんじゃないのか？　だって、添田さんちの学くんを襲ったり、線路の上に立ちはだかったり！

ハタヤマ

ですがナカガワさん、思い出して下さい。こないだの雪まじりの雨が夜どおし降った次の日、資材を運ぶのに足場が悪くなった道に、スズメノカタビラを食いちぎってしきつめていた。あれはイノシシの仕わざだったじゃありませんか！

ナカガワ

あれはたまたまだろ！

ハタヤマ

いやでも、次の日、皆さんが資材を運ぶのを坂の上から見ているんですよ！

コイケ

ああ、そう。見てたよ、奴らは！

サカイ

あの時は、オレたちもどういう顔して奴らを見ればいいのか、わからなかったじゃないか！

ハタヤマ

それだけじゃありません。その線路に立ちはだかって列車を止めたのだって、次の日の補修工事で、線路と枕木の間に、基準外のスキ間が出来ていたことがわかったでしょう!?

テラカワ

そう……反省してるんだよ、奴らは。

ハタヤマ

私がこわいと言うのは、そこです。

トクナガ

どこだよ？

ハタヤマ

意思はある。しかるにイノシシは言葉をもたない。つまり言い訳が出

来ない。そこにつけこまれるという事態がおこりうる、ということですよ。イノシシに意思などあるわけないだろ。その論拠でイノシシのすべての行動に、復興のさまたげという意味づけをしようとしているのです。

イノシシに意思があるかどうかで意見がわかれている彼ら。

トクナガ息子

ハタヤマ

だけど、イノシシには山に帰ってもらわなきゃならない、そうだろ？
ええ、つまり、われわれのその思いを逆手にとって、まずはイノシシ退治だ、ということ、復興そのものを先のばしにされる、そこです、私がこわいというのは。

イド

オレたちは線路工事はつづけるぞ。そうだろ!!

「そうだ、そうだ」の声。

ハタヤマ

ん？ 今日も添田さんは……。

クボ

ああ、すっかりとじこもってる。

ニシ
ハタヤマさんの方からも説得してもらえないですかね。ハタヤマさんの言うことなら添田さんも耳を傾けるんじゃないかな。

それに賛同する声、多数。

木島
添田さん、家の修理もこの頃手つかずで……私たちが手伝いに行こうとしても、かえって、どなり返されるような具合で。

ハタヤマ
……。

道子
さっき、ダンディズムがどうの言ってたけど、添田さん、後悔してるに決まってるんだよ。人前で奥さんのことあんな悪しざまに言ってる。わかってないよ、女つてものが！ いや、わかってなかったんだよ！

コイケ
どういうんだよ、女つて？

道子
大切にされてこそその女ですよ。生かすも殺すも男の扱いしだいだったこと！

タナカ
大切にしてたんじゃないのか。添田さんは、奥さんを。

道子
どこがよ！ 人前であんなにコキつかって！

テラカワ

だから、人前だったからって話をしてるんじゃないか、さっきから！
二人きりの時は、ちがったはずさ。でもそれはオレたちじゃわからない。
い。そういうもんだろ、夫婦って。

坂 口

テラカワ

そりゃ変態だよ。人前と二人きりの時に、そんなに態度かえるんじゃない。
変態さ。変態に決まってるだろ、夫婦なんてものは。

坂 口

決まってるよ。

ハタヤマが苦しそうに身をかがめる。

青 木

ハタヤマさん？

ハタヤマ

あ、すみません……ちよつと……。

篠 原

大丈夫ですか。

ハタヤマ

大丈夫です。時々こうなるんです。

鈴 木

苦しいんですか？

青 木

ちよつと横になつたら？

井 本

疲れが出たんだよ。

ナカガワ

イノシシだよ。そうだろ？

井本

え、何が？

ナカガワ

イノシシを追っばらった時のキズだろ？

テラカワ息子

骨かい？ 骨が痛いのかい？

トクナガ息子

内臓の方か？ ムカついたりしてるのか？

上田

汗をかいてるんじゃないの？ こんなに寒いのに。

ハタヤマ、それらの心配を制して。

ハタヤマ

……もう大丈夫です……そうですか、汗をかいてますか……フフ……季節を忘れてる……私の脳がか、それともこの体がか……そのちがいがわからなくなって、不安になる……私は窓をあける……木を見る……空を見る……そこに咲いている花を……懸命に私に教えようとしている、今私がどこにいるのか。どんな季節の中にいるのか。窓の外のものたちは……なのに、窓をあけたのがホントに私なのか、私はわからない……窓の外を見ているのがホントに私なのか……（あたりを見て）ああ、もう沈んだんですね。さっきまであんなにキレイに私たちの町を照らしていた夕陽は。

クボ ハタヤマさん……！

ハタヤマ ……ああ、クボさん……話してくれませんか。今日もまた話してくれませ

んか。御夫婦が消えかかったランプの下にいた時のことを。

ためらうクボ夫婦を、はやしたてる彼ら。実際にそこに、ランプが灯されていて、その下にいるクボ夫婦。（さながら皆でつくりあげる劇中劇のよう）

久保 夫が窓を開けようとしたから私は開けないでって言ったんです。雨が
入ってくるからって。

クボ 雨なんか降ってないよって私は言いました。

久保 でもさつきから音がしているわ。

（ランプを指して）よく耳をすましてごらんよ、この音だよ。電気が送られてくる音さ。

久保 （耳をすませて）……。

ランプが点滅して消える。

と、音がやんだようだ。その暗い中で。

ク
ボ
ね。

久
保
電気が送られてくる音？

ク
ボ
ああ、そうだよ。（立って動く）

久
保
（ので）でも窓は！ 窓はあけちゃダメ！

ク
ボ
ちがうよ、お茶を入れるのさ。キミはろうそくに火をつけてくれ。

お茶とろうそくの火がセットされる。

久
保
新しいお茶碗を買わなきゃね。

ク
ボ
どうしよう。キミの方だけが割れてしまった……同じものがあるかな

……同じものでなきゃダメだろ。

久
保
同じものでもないわ。私のが少しちいさいものだったから。

ク
ボ
オレが言ったのは同じ柄だってことさ。

久
保
ええ、わかってるわ。

ろうそくの火がゆれる。

久保 窓があいてない!?

クボ あいてないよ。

久保 どうしてゆれてるの？ このろうそくの火が。

クボ 落ちついて、じっと……。

久保 あなたの手は？

クボ ここだよ。

久保 ああ、あなたの手だ。

コイケと小池がダンスをしている姿が見えてくる。

クボ あれのせいだよ、ろうそくの火がゆれているのは。

久保 誰？ あの人たちは。

クボ 何を言ってるんだ。オレたちじゃないか。

久保 私たち？

クボ ああ。私たちの家を建てた時、リビングの広さをわかっておこっ

て二人で踊った……おぼえてるだろ？

コイケ夫婦は、ダンスをしながら、移動した場所を「台所」

「ソファセット」「バリアフリー」「テレビ」「トイレ」

「ベッドルーム」「書斎」と言っている。

やがてそのコイケ夫婦のみが残り、

まわりの人たちは消えてゆく。

そして、その脇でミドリが眠っていた。

6. 夢か現か

コイケ

(小池に足を踏まれて) 痛い！(踊りやめて) ……うまくならないな

あ……。

小池

そんなこと言っちゃって。

コイケ

踊りながら眠ってただろ。

小池

眠ってないわよ。

目覚めて、二人を見ているミドリ。

ミドリ

いえ、あの、眠っていたのは私です。

小池

あなたは、ミドリさん……。

ミドリ

ハイ、ミドリです。

コイケ

知り合いか？

小池

ホラ、話したでしょ？ 恋人に会いにいらっしやっただ……。

コイケ

ああ、あの……。

ミドリ

夢を見ていました……私が雨をこわがるので恋人が傘をさしてくれて

「大丈夫だよ。こうやって歩いて行こう」って二人で歩いているんです。傘をさしながら。もしかして、お二人でそんな話をしてらっしゃいませんか？

コイケ夫婦
……。（顔を見合わせて）

ミドリ
いえ、もしかしたら、それであんな夢をみていたのかと……。

コイケ
いえ、私どもはただ……。

小池
ええ、ただ……。

ミドリ
ただ？

コイケ
いつものようにその……。

小池
この人と結婚して正解だったのかと、それぞれに思いながら、その……。

コイケ
踊っていた、と言いますか。

小池
足を踏み合っていた？

コイケ
うん、そう、踏み合っていた……。

ミドリ
踏み合っていた？

コイケ
こいつがなかなかうまくならないから……。

小池
この人がうまくリードしてくれないから……。

ミドリ

(ちよつとガツカリしたように) そうか……。

ミドリ、歩き去ろうとする。

二人は、何かを言つてあげたくて。

コイケ

傘ね……ありました、そんなことが！

小池

ええ、二人で傘に！

ミドリ

……。 (二人を見て)

小池

だって、雨がこわかったから。

コイケ

知っていましたから私どもは、雨に有害な物質が含まれていることを。

ミドリ

ええ、ギイもそう言ったんです。

コイケ

ギイって？

小池

恋人の名前よ。

コイケ

そうか、そうだったな。

ミドリ

だから私を傘の中に入れてくれたんです。そんな人でしたから。

小池

優しい人だつてことよ。わかる？

コイケ

わかるよ。わかるさ。

ミドリ 私は傘の中であの人のぬくもりを感じていました。

コイケ ええっと、その、どういう人だったんですか。そのドアって人は。

小池 ドアじゃない、ギイよ。

コイケ あ、ギイか。

小池 優しい人だつて言ってるじゃない。

コイケ 優しいのはわかったよ。だけど優しいってのは、どうやればいいのか
わからないじゃないか。

小池 どういうこと？

コイケ なつてあげたいじゃないか、その……。

小池 ギイ？

コイケ そう、ギイって人に。そのためのヒントをさ。

ミドリ もつとこう、若くつて——。

小池 オホホホ。

コイケ あたりまえじゃないか！ 無理なこと言うなよ！

小池 どなることないでしょ！ 離れていくわよ、それじゃあ。

コイケ オレが聞きたいのは、トマトが好きとか毛虫が嫌いとか——。

小池 あ、ねえ、手品が得意だったんじゃない？ ねえ、手品。

コイケ 手品？

ミドリ ええ。得意だったのかどうかわからないけど、やってくれました。私

がちよつと元気がなさそうに見えた時やなんかに。

コイケ 手品はオレは……。

小池 やってあげなさいよ。

コイケ 若くなることくらい難しいな……。

ミドリ、青いボールを出して、コイケ夫婦に見せ、それを手で包んで、開くと赤いボールに変わっている。

ミドリ ハイ、トマト。

コイケ こりゃスゴイ！

喜ぶ夫婦の脇で、急に思いつめたミドリ。

小池 ……思い出させてしまったのよ。

ミドリ ……。

コイケ 大丈夫だよ。見つかるさ。

ミドリ ……私はあの人の望まないことをしているんじゃないでしょうか……

小池 ええ、あの人は私に会いたくないんじゃないか。そう思えてきました。どうしてよ。

ミドリ あの人は卒業してもちよつと考える時間が必要だから就職はしないと

言っていました……でも、しばらくは知り合いの会社でアルバイトをさせてもらうって言っていました。傘をつくる会社でした。だからこの町の傘をつくる会社、傘を売る会社を探して訪ねてみました……そんな人は来ていないと言われました。

小池 だけど、それは……。

ミドリ いえ、そうやって探して訪ね歩いてる時に、なぜかあの人がこの手品をやってみせて、驚いてる私を見て笑ってる顔ばかりが思い出されて……「簡単なタネがあるだけなのに」そう言って……何だろう、あの顔は……私の愚かしさを、その愚かしさに気づくべきだって私に言っていたんだって……そう思えてきたんです……。

コイケ 傘をつくる会社……あったか？ この町に。

小池 あったわ。ホラ、浜通りにガラスばりの……何て言ったかな……。

コイケ ああ、あれは売っている店だった。

ミドリ ええ、そこにも行ってみました……かわいいお店でした……6年前に

お店ごと流されたけど……去年、避難解除に合わせて建て直したのだとおっしゃってました。

コイケ だけどその、手品はただの手品だろ……私らだって今、驚いた。なあ。
小池 ええ。

ミドリ あの人は私のことをジェニーって呼びましたけど、時々ジュヌビエーヴって呼ぶこともありました……ジュヌビエーヴっていうのは、傘屋で働く女の子のことです……今、どこを訪ねてもそんな人は来てないと言われるってことは、あの人は私の前から自分の足跡を消そうとしているってことじゃないんでしょうか!?「簡単なタネがあるだけだよ」私にそう言って!

三人、気配を感じて振り向く。

コイケ 何だ? イノシシか?(近づいて行こうとするので)

小池 気をつけて、あなた。

ミドリ
イノシシ？

小池 ええ。ホラ、いつかは線路の上に。とにかく今は、あっちにもこっちにも。

来たのはイノシシではなく道子。

コイケ あ、道子さんか……イノシシかと思った……。

道子 クボさん、じゃなかった。ハタヤマさん見なかった？

コイケ 何だそのまちがいは。クボ、ハタヤマ、全然ちがうじゃないか。

道子 見なかった？

コイケ いや……。

小池 どうしたの？

道子 いえね、添田さんが……。 (口ごもる)

小池 添田さんがどうしたの？

道子 会いたがつてるのよ。

コイケ だったらそんなもってまわった言い方しないで、添田さんがハタヤマさんに会いたがつてるってハッキリ言えばいいじゃないか。

道子 何おこってるのよ。私をイノシシとまちがえたくせに。

コイケ あんたがクボさんとハタヤマさんをまちがえるからだろ。

道子 順番が逆でしょ。あなたが先にまちがえたんでしょ？ それで私はうろたえたのよ。

コイケ うろたえるようなことじゃないだろ。

道子 何、何、何。くもの巣みたいに私にからみつかないで！ で、どうなの？ ハタヤマさんは見なかったの？

コイケ 見なかったって言ってるじゃないか。

道子 たったこれだけの会話なのに！ 1ページ半もつかって！

コイケ オレのせいじゃねえよ！

ミドリが歩いて去る。

道子 (ので) 私、嫌われてる？

小池 ページとか言ったからじゃない？

道子 それ、私のせい？

コイケ いいから！

女たち そうね、そうね！

コイケ どうしたの添田さんが……。

小池 私、ミドリちゃんを――。

小池、ミドリを追って去る。

道子 私の口からは言いにくいわよ。

コイケ 奥さんのことか？

道子 ……。

コイケ 現場にも全然出て来ないんだよ。

道子 （小池が行った方をアゴでしゃくって）ホラ、奥さん。

コイケ うん……（行こうとして）なんでまちがえたんだ。クボさんとハタヤマさんを。

道子 しつこいわね、いい年して！

コイケ、小池のあとを追う。

一人残った道子、ふと不安になって振り返る。

道子 誰？

イノシシが通りかかる。

道子 ……え、私死ぬの？ 何やかや言いながらしあわせそうな夫婦を見た

直後に……え？ どんな教訓をかかえて死ねって言うの？

しかし、イノシシは、所在なげに、そこにいるだけだ。

道子 そう……そんなやり方で私をもてあそぶのね……オレは何もしなかつ

た。おまえの方で動いただけだ……そして少しだけ私に近づいてみせる。おびえた私は走る……その私に襲いかかる……「おまえが走るからだろ」そう言いながら私のしかばねを見おろすつもりね……。

イノシシはゆっくり去ってゆく。

道子 ……ふーっ……走馬灯をみた……一瞬のうちに私の人生のあの時この

時が、消えては現れ、あの時この時の感情がないまぜになって、笑いも嘆きもせぬ顔で私自身を見返しているようだった……「おまえの人生、可もなく不可もない」……どこからか、そんな声が聞こえた……。

丘の上のあの若い男が見えてくる。

若い男

（眼下を見ながら）……海、堤防、道、家……ああ、車が走ってる……おかしいな……以前は走ってる車を見れば、あれはどこに向かっているんだろうなどと考えたもんだが、この頃は……ただ動いてるとしか思わなくなつた……そんな自分を「あぶない、あぶない」と揶揄してみせるボクではあるんだが……（木につけたキズを見て）……この日記をキミに見せる日が来るんだろうか……キミは今どこにいて、何をしている？　なぜあの駅で待っていてくれなかったのってキミは言うかな。だってあの駅は流されてもうなくなつたんだよって言うボクに対してキミは言うかな。でも駅だった場所はあるでしょって……ここがどこで、私たちが誰で、どんな二人だったか。すべてを思い出させてくれる場所は！　でもホントにあの駅が今は……くそっ、パエリ

アが食べたい！ パエリアのことしか考えられなくなってる！ ん？
雨か？ 雨が降っているのか……。

見おろせば、傘をさした人たちが多数歩いている。
若い男は、その傘の群れの中に降りてゆく。

若い男

浜通り……ここに傘屋があったはずだ……（傘をさした者たちに聞いてゆく）すみません、ここらあたりに傘を売ってる店があったはずなんです……（無視された別の者に）すみません、ここらあたりに——（同じく、また別の者に）あのう——。

また無視され、別の者に聞こうとすると。

傘の者1

何だおまえ、山でイノシシと仲良くしてるって奴じゃないのか？

若い男

……。

傘の者2

ホントだ。こいつだよ、イノシシに情報流してるって奴は。

若い男

情報？ 何の？

傘の者3

どこに降りていけばいいのかわかなくてだよ。

傘の者4

今も、情報集めに降りてきたんじゃないの？

若い男

ちがいますよ。ボクはこの浜通りに傘屋があったはずだと思って――。

傘の者5

傘屋で何をするつもりだ？ 傘を買うつもりか？ おまえが傘を買う

ことはないだろ。濡れるべきだ、おまえは！ 雨に濡れるべきだよ！
雨に有害な物質を混ぜこんだのは、おまえらなんだからな！

傘の者たち、去ってゆく。

と、そこに真佐子が立っていた。

若い男

……！

真佐子

探していたのはジェニー？

若い男

(真佐子が雨に)濡れてる……。

真佐子

平気よ、私は……知ってるでしょ？

真佐子に近づこうとした若い男。

それを避けるように身をかわす真佐子。

若い男 ……？

真佐子 近づかないでって自分から言ったくせに……そうでしょう？

若い男 ……。

真佐子 届いた？ パエリア。

若い男 (うなづく) ……。

真佐子 おいしかった？

若い男 (うなづく) ……。

真佐子 (笑って) え？

若い男 おいしかったよ！

真佐子 自信がなかったの……だって、パエリアの色が……ちゃんといつもの

色になっているのか……サフランが古いもののような気がして……色の
なくなつた……。

若い男 香りがしたよ。いい香りが。

真佐子 ずいぶん怒られた。フフフ……遅すぎるって。

若い男 どうしてそうやって離れようとするの？

真佐子 だから——。

若い男 今は二人だけなんだ……ボクの方から近づくから。

近づこうとする若い男。

真佐子

ギイ……。

若い男

(止まる) ……。

真佐子

それがあなたの名前ね。そしてあなたはジェニーを探してる。

若い男

(近づこうとする)

真佐子

ダメ！ それ以上は！

若い男

……ボクが嘘をついてるとあなたは言った……色を奪われたあなたを
あわれんでボクも同じことを言おうとしているだけだって……あれは
本心から？ 今でもそう思ってる？

真佐子

……。

若い男

わかっていたんだよね。ボクたちは同じように色をなくしたんだって。
あのけむりを見た時、北の方に流れてゆくけむりが、その向こうにあ
る海の色の上でへりをなくし、やがて海と空の白にとけていった時、
あれはただのけむりだと思おうとしたボクたちの……その無理が、ボ
クたち自身を吐き出すように、この色のない世界へ追放した……そう
だろ？ わかっていたと言ってくれ。

真佐子 ……わかっていたわ。私たちは同じ世界にいるんだって感じられたか

ら。

若い男 ならばなぜあの時、あんなことを言ったの？

真佐子 あなたは責められるべき立場にある人だったから……被害者に寄り添

おうとするあなたが悲しかったから。

若い男 世間体？ 二人だけの世界なのに！

真佐子 二人だけじゃない。私には夫も、あなたと同じ年頃の息子もいたわ。

少しずつ近づいている二人。

若い男 ああ、サフランの香りだ……。

真佐子 一度でいい。ジェニーって呼んで。

イナビカリ、そしてカミナリ。

抱きしめようとして真佐子の首にアザを見つけた若い男。

若い男 どうして、こんなことを！ あなたはどうして！

真佐子

(首スジを押さえ、あとずさる)

若い男

生きてゆくことだけが、ボクたちのつとめじゃないのか!?

丘の上に見えたイノシシ。

若い男

(そのイノシシに) おまえには見えているのか。夏になれば光の中で咲きほこるヒマワリの色は！ 恋人たちが雪の中に捨てたサザンカの赤は！

イノシシのそばに立っている真佐子。

若い男

真佐子さん……！

むろん先刻の場所に真佐子の姿はなく、

その丘の上に歩いてゆく若い男。

7. 添田家、そして

そこに立ちつくしているハタヤマ。

奥の間から出てきた添田。

添 田

残念としか言いようがないな……せつかくこうやって知り合いになれたというのに……。

ハタヤマ

ハア……。

添 田

私の方から復興本社の方に向けあっても無理ですかね。

ハタヤマ

(曖昧に笑って) ……。

添 田

え？ え？ そりゃどういう意味ですか？

ハタヤマ

私にかわる者が仕事は引き継いでくれるはずです。

添 田

かわりの者だったって、ハタヤマさんのようにってわけにはいかんでしょう。

ハタヤマ

……。

添 田

ん？ 爪を噛むのは、それはクセですか？

ハタヤマ

(確かに噛んでいた) あ、いえ、これは……。

添 田 (大笑いして) ハハハ、クセじゃないんだ!

ハタヤマ じゃあ私はこれで……。

添 田 ちよつと待って下さいよ、イドさんやニシさんも寄ってくれるって話でしたから。

ハタヤマ またあらためてお会い出来ると思いますので。

添 田 ……思い出すなあ……あの時もそうだった……何だか急がれて……ねえ、そうでしたよね。

ハタヤマ ……。

添 田 だからパエリアが間に合わなかった。

だいぶ回復した学が顔を出す。

添 田 学、おまえ……。

学 無理だよ。一日中寝てるなんて。

添 田 横になってるだけでも休むことになるんじゃないか。

学 休んでばかりもいられないって話さ。(ハタヤマに) ホントなんです
か、東京本社に戻られるって。

ハタヤマ ええ……。

学 やつと親父おやじも現場に復帰出来るというのに……そうだろ？

添田 ああ、皮肉なことだ。まるでオレと入れかわるように……。

学 オレだって、あと半月もすれば――。

ハタヤマ すいません。これからは東京にいて、こちらとのパイプ役になれば
と思っっています。

学 イヤになったんじゃないですよね。この町にすることが。

ハタヤマ いえ、そんなことは……。

学 みんながハタヤマさんを頼りにしているんです。だから陳情書に対する回答がなくても、ないままでも、ああして線路の工事をつづけていることが出来るんです。

ハタヤマ わかっています。そのことは……ええ、わかっているからつらいんです。
どうなんですか、ホントのところは。線路は、内陸の方を迂回すれば
すむことだって話になってるんじゃないんですか？

ハタヤマ そうなっちはいけない！ それは是が非でも阻止しなければならぬ。
でなければ、皆さんが帰還すること自体を、よしとしないってこと
になる！

添田 学……。

学 何だよ。

添田 熱がぶり返すから。

学 平気だよ、熱なんか。

添田 (外から笑い声が聞こえたので) ん？ 帰ってきたかな？

イドとテラカワと道子が入ってきている。

添田 ん？ ニシさんたちは？ 一緒じゃないの？

イド うん……ハタヤマさん、聞いたよ。

ハタヤマ すいません……。

添田 これからは、東京で、うちらとのパイプ役になりたいっておっしゃるんだよ。

イド ニシさんたちは今、復興本社の方に向けあいに行ったんだよ。

ハタヤマ え？

イド なんだその、そういう人事に関することだって、今の私らを無視することはないだろうって、みんなの意見なんだ。

テラカワ 何たって私らのことを一番わかってってくれるのはハタヤマさんだから

な。

イド そう、そう。

道子 学くん、もう大丈夫なの？

学 ああ。

ハタヤマ 復興本社にかけあいに？

イド うん、ハチマキ締めてって感じかな。ハハハ。

添田 だけど、ハタヤマさん自身の問題もあるんじゃないかな。

イド 問題って？

添田 問題っていうか、人生設計っていうかさ……まだ若いんだし。

(落ち着かなげで) ……。

添田 どうしたの？

道子 いや、何だか……。

テラカワ 道子さん、イノシシに襲われそうになったららしいんだよ。

添田 え？

テラカワ (道子に) ホラ。

道子 ……走馬灯をみたのよ……イノシシに見つめられて……こわかった

……私が動き出すのを待っていたんだよ、あれは。動き出したとたんに襲うつもりだったのよ……だから私はじっとしてた……その時、学くんのことを思ったのよ……動いたんでしょ？ 動いたから襲ってきたんでしょ？

学

動いたよ。動いたさ。負けてたまるかって思ったから。でも、あいつら強いんだ……早いんだ。重いんだ！

道子

(何か考えてる)

テラカワ

(ので) 何だよ。

道子

いや、あれは早い安いうまいか……。

テラカワ

何考えてんだよ！

道子

でそう！ 思ったのよ。イノシシは、若い者をねらうんだって。若い命が好物なんだなって……早く年をとりたい。あの時そう思ったよ。

テラカワ

とってるよ、年は、もう！

道子

そりゃ昔に比べればね。

皆が道子を見無視する。

イド 浜通りでイノシシを見たって人もいたよ。アスファルトの上をゆつくり歩いていたんだってさ。

テラカワ ハタヤマさんがおっしゃったんだ。線路復旧させるより、イノシシ退治が先決問題だつて上の方が考えるかもしれない。それがこわいつて。

そうですよね。

ハタヤマ ええ……すいません、ちよつと腰をおろしていいでしょうか。

皆、気をつかう中、腰をおろすハタヤマ。

添田 誰も、ホンキにはしてないんだな……。

道子 何をよ。

添田 ハタヤマさんが私らを見捨てるなんてさ。もちろんオレだつてそうさ。
ハタヤマ ……。

添田 明日からまたここを工事の休憩所にしてくれよ。

テラカワ ああ、そりゃありがたい！ なあ。

イド うん！ そうこなくっちゃ！

添田 道子さん、あんた女なんだから……。

道子 え、何？

添田 介抱してあげなきゃ、ハタヤマさん。

ハタヤマ あ、大丈夫です。

道子 女なんだからって理屈がよくわからない……。

イド しかも若い女なんだから。

道子 それなら少しわかる。(で、介抱しようとする)

ハタヤマ 大丈夫ですよ、ホントに。

テラカワ あれ、学くん……。 (奥を見て) ああ、こっちか……。いや、急にいな

くなつたような気がして。

イド あ、オレ線香を……。

テラカワ あ、そうだな。

イドとテラカワ、奥の部屋へ。

添田 (道子に) 何？ どうして介抱しないの？

道子 だって……。 (大丈夫だって)。

添田 言うよそりゃ、大丈夫だって。だって迷惑かけたくないもん！ そう

ハタヤマ

……あの時、ボクがパエリアを待っていたら、結果は変わっていたでしょうか。……ボクはわかっていなかったから、添田さんが何をしようとしていたか……真佐子さんがつくったパエリアをボクが食べる……それを目のあたりにして、つくった者とそれを食べる者の心の中を読みとることが添田さんのやろうとしていることだって、ボクはわかっていたから——！

学

ハタヤマさん、それはちがいます。

いつの間にか学が顔を出していた。

添田

学……。

学

親父はハタヤマさんにお礼がしたかったです。息子を、ボクをイノシシから救ってくれたハタヤマさんにお礼がしたかったです。母の得意な料理、パエリアを食べて欲しかった。それだけなんです。

添田、たまらず出てゆく。

道子

添田さん！

添田を追ってゆく道子。

学は、ハタヤマのシャツを手にもっていて。

学

これ、シャツ、つくろってありますから。

ハタヤマ

ありがとうございます。

学

ここにおいておきます。

ハタヤマ

……。

学

ハタヤマさん……残ってくれませんか、この町に。

ハタヤマ

……。

学

このとおり、ボクは回復してます。あなたのおかげなんです……今では、あの線路が復旧し、流された三つの駅が元の駅に戻る時、ボクの体も元の体に戻っているんだろう。そう思っています。駅には多くの人たちが北へ向かうため、南へ向かうために集まって海を望むホームで列車を待っている……ボクもそのホームに立ち、入ってくる列車のたてるかすかな空気のふるえの中にいるような気がする……。そして

この回復した体は、イノシシに襲われた日のことをホントウにあったことだとは信じられず、ただハタヤマさんに救われたことだけを記憶しつづけているんです。

ハタヤマ
学さん——。

いえ、母が色を感じられなくなったことをボクも知っています。見えるもののすべての色彩を。そしてハタヤマさん、あなたも——。

ハタヤマ
……。

同じ苦しみを持つ者同士が心をわかち合うのは当然のことじゃないですか。後悔なんかしてませんよね。

ハタヤマ
何を？

ボクを救ってくれたことをですよ。

ハタヤマ
……してない、後悔なんか……。

よかった……。

ハタヤマ
ただボクにはこの町を一度離れる必要があるんです。

学
どうして？

ハタヤマ
わからないからです。自分が何をすべきなのか。

学
それは……どういうことですか……工事の中止命令が出てるとい

とですか？

出てきているイド、テラカワ。

それを見たハタヤマは、入れかわるように、奥の間に入ってゆく。

学

ハタヤマさん……！

皆がハタヤマの方を見た。

そして、のびている線路が見えてくる。

それに沿って歩いてくる男たち。

タナカ息子

なぜハタヤマさんは、あんな嘘をつくんだ!?

ナカガワ

嫌いになったんだよ。オレたちのことが！

サカイ

うん、きつとそうだ。

トクナガ

生意気か？ オレたちは。

タナカ息子

生意気？ 何だそりゃ。

トクナガ
だって、なあ。

トクナガ息子
うん。こないだ東京から取材だって言ってオレたちに話を聞きに来た

奴らがいたんだよ、急に。なあ。

トクナガ
うん。急に能面みたいな顔になってさ。

トクナガ息子
オレたちは、今のオレたちのことを話したただけだぜ。向こうが聞いてきたから話しただけさ。

サカイ
わかる、わかる。生意気だって思われたんだろ？ 被害者づらすんじやねえって感じだろ？

トクナガ
そう、そう。「そりゃ、私たちにはあなた方の苦労はわかりませんよ」って顔だよ。

ニシ
ま、百歩譲って、ちょっと不機嫌な受けこたえになったとしてだよ、しょうがねえじゃねえか。なあ。訴えたくもなるさ。先行きも見えねえ状態で生きてんだから。

トクナガ息子
だからって、「へえ……そうですか」って、そんな顔されるスジ合いはないよ。

タナカ息子
だからハタヤマさんだろ、問題は。

ナカガワ
おんなじだって話だよ。ハタヤマさんだって、オレたちのことそう思

サカイ
被害者づらすんじゃねえって？
そう、そう。

ナカガワ
ってんじゃねえのか？ って話さ。

ニシ息子、話を続けようとするが、
そこにミドリが通りかかる。
軽く挨拶して、すれちがってゆく。

トクナガ
（ミドリのこと）東京から来たって子だろ？
聞いてみようか。オレたちのこと、どう思ってるか。

トクナガ
うん、聞いてみよう。ホラ。

タナカ
え、オレが？

タナカ、歩いているミドリを追って、
線路の向こうで追いついた。
タナカがミドリに話しかけているのを離れたところから見て
いる男たち。

暗転—。

8. 事は停滞する

いつもの労働のあとのくつろぎの場所に女たちが集まっている……。

昼さがりの女たち、といった様子。

木島 そりゃ考えすぎでしょ。

上田 うん、私もそう思う。

青木 だいたいあなた久保さん、あの道子さんのことが嫌いなだけじゃないの？

井本 どうなの？ 嫌いななの？

久保 好きとか嫌いとか、私、そういうの無い。

皆、だらしなく笑って。

青木 そんなの人間じゃないわよ、久保さん。

久保 だって、ないもん。

越智 なくてどうやって男と女がくっついたり別れたりするのよ。

加藤 越智さん、ここは別に男と女じゃなくてもいいんじゃない？ 大きく

人間というものはって構え方で。ね。

木島 どっちでもいいと思うけど。

加藤 おや！

木島 今は男と女の話だし。

加藤 おやおや、八百屋のおやじおや。

上田 何なの、それ。

でまた皆、だらしなく笑う。

久保 道子さんは道子さんで、普通に添田さんちの手伝いに行ってるわけ

しょ？ あの人、真佐子さんとも仲良かったし。

上田 普通に、なの？ クボさんが、あなたの旦那さんがいるからでしょ？

ちがうの？

久保 だから私は、主人の方が引っぱりこんでるんじゃないかと思ってるの！

篠原 引っぱりこんでる？ どこによ!?

久保 どっかに!

篠原 (他の者に問いかけるように) どっかってどこ……?!

土屋 寝室?

久保 (耳を押さえて) やめて!

皆、ちょっとあきれた風であるが。

戸田 久保さん、久保さん、冷静に考えてみましょう。要するに、あなたの御

主人が、道子さんの働きぶりをちょっとホメたっただけのことですよ?
よ?

久保 ちよつとじゃない! デレーつとした顔でホメたの!

戸田 何だつてホメたんだっけ?

久保 男に対する気づかいが適確で、行動もすばやいって。

越智 ホラ、やっぱり男と女の問題よ。

坂口 行動もすばやいって。だってあの人、学生時代にインターハイに出てるからね。

戸田 そうなの？

坂口 そうらしいわよ。オリンピックの候補にされそうになって、そんなに青春無駄にしたいくないってグレてみせたらしいわ。

西川 へえ、おどろき。

坂口 山道なんか今でもカモシカより早くかけあがれるって豪語してた。ってそりゃ嘘だけどね。

皆、明るく笑う。

木島 そういえば、あの人、イノシシに襲われそうになったんだってね。

上田 聞いた、聞いた。走馬灯みたって。

井本 走馬灯を？

上田 うん！

木島 男の顔が次から次に出てきたのかしら。

越智 かもね。かもしかね。

木島 おい。

加藤 おいおい、八百屋のいともはとも野菜嫌いでおいおい。

木島 無理があるでしょ、それ。

加藤 これで許して。都こんぶ。

久保 終わり？ 私の話は！

他の者 ……。

久保 終わりなの、私の話は！

寺島 小池さん、寝てるから。

小池 起きてるわよ。

鈴木 久保さん、私、聞いてあげる。道子さんに。

青木 何を？

鈴木 あなたクボさんに引っぱりこまれた？ って。

中井 仮に引っぱりこまれたとして、正直に言う？

鈴木 大丈夫。私、心の中が見えるから。

西川 どこに引っぱりこんだかもちゃんと見える？

久保 (耳を押さえて) やめて！

鈴木 大丈夫よ久保さん、あなたの知りたくないことは私言わないから。

井本 あなたが正直に言わなくてどうするのよ。聞いてあげるとか言ってお

きながら。

鈴木 大丈夫、大丈夫。

井本 (加藤に) ホラ。

加藤 (急にさされて) 大丈夫、大丈夫。八百屋の大八車で——無理よ。

久保、フラフラと歩いて。

久保 これが世界ね……これが世界なのね。

坂口 どこに行くの？

篠原 久保さん！

久保 風にでも聞いて。あるいは(急に可愛ぶって)イノシシにでも。

久保、出ていく。

篠原 (可愛ぶったのを真似て) 何なの、これ。

追おうとする者あり。

青木

(それを制して) 乗りこえてもらいましょ、ここは。さして険しい坂じゃない。

それでも何となく白けた感じの皆。

その空気の中で、鼻歌を歌い出したのは鈴木。その鈴木を不思議そうに見る皆。

鈴木

(見られているので) フフ……生きていくって、たいへんね。

いきなりその鈴木になぐりかかろうとする小池——そばに
いるものに必死で止められて。

坂口

何よ、小池さん！

小池

(夢からさめたように) ハッ……今、なぐろうとした。この人のこと。
したわよ。

小池

……。

井本

どうしたのよ。

小池 急にアツタマきて。

根本 寝てたんじゃないの？ あなた。

小池 寝てたのかな……。

野口 寝てたのよ。夢をみてたのよ。だってなぐりかかるようなことじゃないもの。

小池 そう？

長谷川 謝った方がいいわ。だって（鈴木が）こんなにおびえているもの。

鈴木 （今ごろ）やだ！ こわーい！

青木 鈴木さん——いや、小池さんでもいいわ。ちょっと歩いてきなさい。

しかし二人とも動かず……。

……空気は重い。

戸田 それにしても、男どもは……どんなことがあっても工事はつづけるって言ってたんじゃないかった？

井本 まだ添田さんちにいるのかしら。

田宮 見捨てられたとか言ってるのよ。見捨てないわよ、ハタヤマさんは！

井本　　そうよ、そうよ。

上田　　（おとなしい青木に）なに？　ノリが悪いわね。

青木　　うん……。

木島　　うん。だって！

青木　　ちよつと待つてよ。だって、その東京本社に呼び戻されたって話、嘘
だつて言うじゃない。なんでそんな嘘つく必要があるの？

土屋　　会社のやり方にイヤ気がさしたのよ。私はそう思うわ。

井本　　うん、私もそう思う。

戸田　　陳情書に対する回答が復興本社の方に来てるんじゃない？　ハタヤマ

さんは、それを握りつぶそうとしてるのよ。私たちのために！

青木　　工事は中止しろつて？

戸田　　そういうことになるわね。

青木　　だったらそう言ってくればいいじゃない！　さつきあなただつて言
つてたでしょ。どんなことがあつても工事はつづけるつて、言つてた
つて！　実際、そうよ、私たちだつて！

青木の意見に他の者も「……」。

篠原 (小池に) 寝てる？

小池 起きてますよ。

鈴木 ……起きてらっしゃるわ。

越智 今、どこにいるんだろう。ハタヤマさんは……………？

坂口 それよ。

小池 久保さん！

そこに立っていたミドリ。

篠原 久保さんじゃないわよ。

鈴木 ホホホホ。

木島 ミドリさん……………どうしたの？

ミドリ 桜並木を歩いてきました……………今日は工事はお休みなんですネ。

青木 (他の者と顔を見合わせてから) ……お休みってわけでもないのよ

……………

ミドリ でも……………。(と振り返るような)

上田 みんな知ってるわよ。毎日のようにあなたが工事を見てらっしゃるの

……男どもも、それで張り切ってたところあるんだから。若い娘さんが
見てるって言うて。

ミドリ すいません。邪魔だったでしょうか。

沼田 聞こえた？ 男どももそれで張り切ってたって言うてるの。

ミドリ あ……。 (照れたような)

木島 で、その……ギイの手がかりは？

ミドリ ……。

鈴木 駅が出来るのを待つてらっしゃるのよね。そうでしょうか？

ミドリ 浜通りのあのガラスばりの可愛い傘屋さんで働かせてもらえないかと

たのんだのですが、人を雇うほどの余裕はないと言われ……。

鈴木 駅が出来るのを待つてるのよね。

小池 駅、駅ってうるさいわね、この人は！

鈴木 何よ！

またなぐりかかろうとするのを。

青木 (止めて) どうして歩いてこないの！ あなたたちは！

鈴木と小池は、その場でそれぞれ歩き始め、つづく会話の途中で二人とも出てゆく。

ミドリ

あのう……お願いがあるのですが……（皆に見られて）……私も皆さんと一緒に働かせていただけないでしょうか。

皆、顔を見合わせる。

井本

働くって……私たち別にお金もらってるわけじゃないのよ。

ミドリ

ええ、それは……ただ探し歩くだけの毎日に何か疲れて……線路がのびて駅が出来てゆくことを見ているだけの自分が、急にこわい者のように感じられてきたんです。

寺島

こわいって？

ミドリ

あの工事を見ている自分が今どんな顔をしているんだろうって思った時、ふとそんなことを思った時、イヤな顔だ。憐れんでいる、私は憐みの目でこの復興を見ている。そう感じられて。それはとても傲慢なことだ。そう感じられて。自分自身に耐えきれなくなっ……。

沼田 だってあなたは、駅が出来ることを誰よりも望んでいるはずでしょ？
ミドリ それも、思えば、私の傲慢……「ぜんぶおまえの都合だろ」そう言わ
れているような気がして……。

中井 そんなことないわよ。ねえ。

根本 そうよ、言ったじゃない。私たちはあなたのことを応援しているつ
て！

ミドリ あの人はわかっていたってことなんじゃないですか？ 私が憐れんで
は見せるけれど、ここ（胸）には、ただただ傲慢なものが隠されてい
るだけだろうってことが。

野口 だって、災害のあと、この6年の間、あなたたちは会ってもいないん
じゃないの！ 憐れんでみせるも何もないわよ！ そうでしょう!?
ミドリ いいえ、ですから、私がそうなるだろうってことをです。あの時、毎
日のように会っていた。その中であの人は感じていったのにちがいな
いんです。

坂口 何をよ。

ミドリ 私の中には差別があるだけだって。

坂口 差別!?

ミドリ

しあわせな者とふしあわせな者。その差別をして、自分がしあわせな側からふしあわせな者を憐れんでみせる。それがこの女のモラルなんだ。そう感じていったにちがいないんです。その証拠に――。

皆

……。

ミドリ

その証拠に、私はあの人に恋をしている時、しあわせだった……笑顔であの人のもとにかけて行く時、あの人には私の中に抜け落ちていくふしあわせを見ようとしていたんです。それでも私への気づかいから少なくとも私には私と同じだと思える笑顔で私を迎えてくれた……。

坂口

それってさあ……（他の皆に問うように）どういうこと？

加藤

うん、恋をしたらしあわせって理屈どおりじゃない？

井本

そうね……差別って、そりゃするだろうけど……。

上田

差別からうまれる憐み……ま、それも人間だからね。

青木

ちよつと鈴木さん、呼んできて。

篠原

え、なんで？

青木

あの子の意見も聞いてみたくなった。

加藤

ああ、しきりとロマンチックとか言ってたからね。

篠原

ロマンチック、引っぱりこむ？

加藤 うん。

出てゆく篠原。

青木 とりあえずさあ、一緒に働いてもらうかどうかかってことよ。

「いいんじゃない?」「働いてもらいましょうよ」「男どもの士気があがるかも」など、ほぼ賛同の声。

青木 こんな感じだから。

ミドリ ありがとうございます。よろしくお願いします。

ミドリ、席に座ってみて、嬉しそうに皆を見まわす。

井本 華やぐわね。くやしいけど。

ミドリ あ、地味な服を着ます。

井本 そういう問題じゃなくて。

西川 (ミドリに) 聞いていい？

ミドリ ハイ。

西川 あんたんとこ、親は何してんの？

木島 何よ急に。

西川 いや、どういう家庭で育てば、何つうの？ 差別とか憐みとか、そつう

いう、何つうの？ 発想が生まれるのかと思つてさ。

ミドリ 父は教師です。

教師の子供は道はずしやすいつか、勝手なことを言い合う
女たち。

田宮 なんだつて？

他の者 学校の先生よ。

田宮 あらやだ！

そこに、久保があわてたように入ってくる。

木島 どうしたの？ イノシシ!?

久保 み、み、み……。

木島 ああ、道子さん。

道子が入ってくる。

皆、何となく誰からも口を開かないので。

道子 何？

久保 (人にまぎれた状態で) だ、誰を捜してらっしゃるの？ 男？ 誰か

男？

道子 ……誰？ 今、質問したの……。(言葉の主を捜す)

久保のまわりの人たちが散らばって、

久保があらわになる。

道子 え、久保さん？

久保 エース、アイ、ドゥー。

道子 ちょうどよかった。これ女房に会ったら渡してくれって旦那さんにあ
ずかってきたの。

木島 何？ 延長コード？

道子 みたいね。

木島 延長コードだって。

久保 リアリー？

道子 何？

久保 リアリー？

道子 え？

上田 ホントかって聞いてんのよ。

久保 オッケー。

井本 それ、渡しに来たの？

道子 んなわけないわよ。ちょうどよかったって言ってるじゃない。(と延

長コードを久保に渡す)

上田 (久保に) ちょうどよかったんだって。

久保 ……。

青木 みんなまだいるの？ 添田さんちに。

道子 それよ。私、いたたまれなくなって出てきたの。

青木 どういうこと？

道子 みんながみんな、ハタヤマさんの悪口ばかり言って！ 欠席裁判みたいなことになってるのよ！

木島 いないの？ ハタヤマさんは。

道子 いないの！ あの人の住んでらっしゃるホラ、サッカーの宿舎だったところに行っても帰ってないらしいのよ。

加藤 悪口ってどうなのよ。

道子 結局、口先だけの男だったとか、そういうことよ！ ちょっと反対の意見なんて言おうものなら、もうたいへん！

越智 どうたいへんなのよ。

道子 とどめは「イノシシに食われる！」こうよ。

越智 あんなにあがめたてまつってたのに!?

道子 だから余計よ！ だから余計に！

加藤 宿舎に帰ってないって、どこに行ってるのよ、ハタヤマさんは！ だって東京本社に戻るって話は嘘だったわけでしょ？

道子 私に言わないで！

上田 行ってみる？ 添田さんちに。まだみんないるんでしょ？
井本 そうね、そうね。

出て行く女たち。

西川 (去り際にミドリに) 小学校？ 中学校？
ミドリ 高校です。
西川 アウチ！ (去る)

ただ、青木と久保とミドリは残って。

青木 (出ていこうとした道子を) 道子さん。
道子 え？
青木 あなた、ホントは知ってるんじゃないの？
道子 何を？
青木 ハタヤマさんがどこにいるのかをよ。
道子 ……何、それ。

青木 だって、あなたは知っていたんだものね。真佐子さんとハタヤマさんの関係を……そうでしょう？

道子 関係って？

青木 それを私に言わせるの？

道子 ……。

久保 ごまかすわよ、その人。

青木 久保さん、黙ってて。だってあなたは真佐子さんとはごく親しい間柄だったでしょう？ もし真佐子さんが自分の胸におさめておけないことがあったら、当然あなたにも相談していたはずよ……ちがう？

久保 人の目を盗んであなたは他人の夫と――。

青木 (久保に) 延長コードで遊んで！

久保 ……。

道子 むしろ光栄よ。青木さんにそう思われているのなら……そして、おっしゃるように真佐子さんが私に相談していてくれたら、今ここで私は喜んで真佐子さんのことをあなたに話してきかせるわ……でも残念ながら、あの人は自分の胸をあかさような人じゃなかった……。

青木 ってことは、感じてはいたけれどってこと？

道子

ええ。いちおう私も女だし……その前に、そのことが、なぜハタヤマさんの居るところを私が知ってることになるのか、それがわからない。

青木

そう……じゃあ、いいわ。

道子

いいわって？

青木

あなたも行くこうとしてたんでしょ？

道子、ミドリを見て。

道子

誰？

ミドリ

あ……。 (軽く挨拶)

道子

(青木に問うように) え？

青木

今日から私たちの仲間になって下さったの。ミドリさん。

道子

ボランティアの人？

青木

ああ、まあ、そんなところかな。ね。

ミドリ

ハイ。

道子

あ、会ってるわ一度……ごめんなさいね。私、若い人見ると、視界が

ボヤけるの。

久保 あんなこと言ってる！

道子 あ、そっち（久保の方）は、はっきりくつきり。じゃあ、行くわね。

道子、出てゆく。

青木 ありや知ってるわね。ハタヤマさんがどこにいるのか。

ミドリ 誰なんですか。ハタヤマさんで。

青木 ん？ うん……（久保に）何なの、その延長コード？

久保 ちよつとしたほのめかしだと思っわ。

青木 ほのめかし？ 何の？

久保 だから——。（何か言おうとしたが）

青木 （ミドリに）行ってみる？ 私たちも。みんなに紹介するわ。

ミドリ ハイ。

青木 （行きながら）ハタヤマさんてのはね、復興本社の人で、私たちの力になってくれる人——くれてたって言った方がいいか……。 （などと説明して）

出てゆく青木とミドリ。

久保

(も追って) 聞きたくないってか？

9. そこにいるのは私か？

見えてくるがれき。

その上を歩いてのりこえてきたイノシシ。

そのイノシシを追ってきたように、がれきの上にあらわれた
ハタヤマ。

イノシシは、ハタヤマに気づいたように立ちどまる。

ハタヤマ

……どこに行くつもりだ？

イノシシ、こたえようもないという風に歩き出す。

ハタヤマ

どこまでも追っていくぞ、おまえを……そうやってシラを切るならば
な。

イノシシ

(また止まった)

ハタヤマ

そうか……少しは責任を感じているということか……(イノシシの目
のあたりを見て) ちょっと待て……涙か？ 涙を流しているのか？

どこでおぼえた？ そんな芸当を。同情を誘おうって腹か？

イノシシ
(また歩き出す)

ハタヤマ
(行く手に立ちはだかつて) 言っておくけど、涙など何の証拠にもなりはしないぞ……それとも、山に帰ればみんなに涙を見せることが出来ない。その矛盾の中に生きてるって言いたいのか？……だから言うてるだろう。涙など何の証拠にもならないって。

イノシシ
(首を振った)

ハタヤマ
おや、首を振ったな……わかってるさ。オレに向かってきた時、おまえが手を抜いたってことは……けどな、そのことが、オレをどれだけ追いこむことになったのかってことにおまえは気づいてない！

イノシシ
……。

ハタヤマ
気づいてないんだよ！ おまえがオレに対して手を抜いたんだってことが言えない——そこに始まる嘘にオレが支配されつづけているってことに！

イノシシ
……。

ハタヤマ
なぜ手を抜いた。オレに対して。わかるか？ オレはおまえを追っ払ったってことで、感謝されるスジ合いはないってことだよ……え？

感謝されたわけじゃないだろって？ フフフ、かもしれないな……おまえも見えていようって心づもりだったか。オレがあの人をつくったバエリアを食べるところを。片頬で笑いながら！

そう言うと、ハタヤマは、近くのがれきの中から、棒きれをつかむと、イノシシに向かって、なぐりかかった。

逃げるイノシシ、追うハタヤマ。

反撃するイノシシ、闘うハタヤマ。

……。

力尽きたようにへたりこむハタヤマ。

イノシシは逃げたようだ。

……。

ふと、近くの桜の木に目を奪われるハタヤマ……その木に近づいてゆく。

ハタヤマ

(見て) ……！

若い男

つぼみだ……。

ハタヤマ
(驚いて振り向く)

いつしかそこに若い男が立っていて。

若い男
自分の声かと思った？

ハタヤマ
……。

若い男
じき桜は満開になる。こいつらは季節を忘れないからね。

ハタヤマ
(若い男が手に持っているものを見て) ……それは？

若い男
あ、これ？ これは、ホラ。

例の手品用の小さなボールだ。

若い男
忘れてたろ。これのことも。

ハタヤマ
(桜の木を見る) ……。

若い男
今、恋人のことを思った。そうだろ？

ハタヤマ
キミは？

若い男
ああ、ボクはキミだよ。

ハタヤマ ……。

若い男 そうかなって思ってたの質問だろ？

ハタヤマ (照れたように笑う) ……。

若い男 何？

ハタヤマ ハハハハハ。(と大きく笑う)

若い男 (あたりを気にして) 気をつけた方がいいよ。理由もないのに笑ってると、ここ(頭)がおかしいって思われるから。

ハタヤマ 理由？ あるだろ。

若い男 どんな？

ハタヤマ だって——。

若い男 ボクがキミだってことのどこに笑う理由があるんだ。

ハタヤマ ……。

若い男 だろ？

ハタヤマ、若い男の手から手品用のボールを奪いとって——。

若い男 おいおい、自分に対する礼儀ってものはないのか！

ハタヤマは、ボールの色を確かめるように、見比べている。

ハタヤマ ジェニー……。

若い男 ……。

ハタヤマ (若い男にボールをさし出して) やってみせてくれ。

若い男 タネがわかってる人間に対してか？

ハタヤマ いいから！

若い男 ……。

ハタヤマ そうか。身に覚えがないんだな。

若い男 身に覚え。何の？

ハタヤマ これさ。このボールの意味がわからないんだろ。これで何をしたらいいの？

いのか。

若い男 わかっているよ。手品だろ。

ハタヤマ ……。

若い男 わかっているに決まっているだろ！ やってあげたんだよ。ボクは、彼女

に！ 先に卒業出来た彼女は一年遅れてしまったボクがそのことを悲しんでるように見えたんだろうね……ボクをなぐさめてくれた……ボ

クはその彼女の気づかいにどう接してあげればいいのかわからなくて……彼女に見えるボクでなきゃいけないような気がして……悲しいけどキミがいるから大丈夫だよって言っておげなきゃいけないような気がして……（手品をやる仕草で）ホラ、ここに赤いボールと青いボールがある。よくよく見て……って……ああ、そうさ。悲しいけど、キミがいるから大丈夫だよって意味だったんだ……こんな他愛もない手品だったのに、彼女は驚いて、そして、よろこんでくれた……。

ハタヤマ

わかつていたんじゃないのか？ 彼女は。

若い男

何を？

ハタヤマ

このタネをだよ。

若い男

……。

ハタヤマ

そうだろ！

若い男

何が言いたいのか？

ハタヤマ

それもまた彼女の気づかいだったんじゃないのかってことだよ。

若い男

驚いてみせたことが？ よろこんでくれたことが？

ハタヤマ

ああ。

若い男

……（考えて）いや、ちょっと待って……え？ タネがわかってい

た？

ハタヤマ ああ、キミが手品にこめた意味など最初っから無用だったってことさ。

若い男 いや、そういうことにはならないだろ……いや、その前に、キミはど

うしてそんなにエラそうなんだ。ボクに対して！

ハタヤマ エラそう？ そんなこたないよ。

若い男 いや、エラそうだよ！ 身に覚えがないんだろとか、この（ボール）

意味がわからないんだろとか、あそこらへんから、すっごいエラそう
だった！

ハタヤマ 考えすぎだって。

若い男 それか。その一言で万事棚上げか!? 考えすぎだよって、そんなこと

自分が考えすぎるってことの表明にしかないぞ！

ハタヤマ ……。

若い男 みろ、みろ。もう考えてる！

ハタヤマの手からボールが落ちる。

若い男 ん？ どうした？

ハタヤマ

……オレは、あの人の告白を聞いた……色が……見えるものすべ
ての色が……そう言ってオレの服を、顔を、髪を触ったんだ……オレ
は恋人にメールを打った……風景が私の目の前で、古い写真のように
今を拒絶し「おまえもまた今ではない」と言ってるようなのです……。
……。

若い男

ハタヤマ

オレは思った……あの人の見えるものに色が戻るまでは恋人のことは
忘れるべきだって……責任があるはずだから、オレには……恋人がジ
エニーが東京に戻った一年後にオレは今の会社に就職した……そのこ
とは四月になって、ジェニーが会いに来てくれた時、満開の桜の下で
打ち明けるつもりだった……オレたちは桜の下で……。

若い男

ハタヤマ

……キミには、キミ自身には色は見えていたって言うのか？
(若い男を見て)……いや……同じようにオレの目の前から色が消え
ていった……海の方にけむりが見えた時から。

若い男

考えすぎたからだ。

ハタヤマ

何を？

若い男

あの人のことを！

いたたまれなくなったように動きまわるハタヤマ。急に。

ハタヤマ いや！ 考えすぎはおまえの方だ！

若い男 ボクはパエリアを食べた。キミは食べなかった……考えすぎたからだろ！

ハタヤマ 食べた？ パエリアを!?

若い男 ああ、食べたよ。

ハタヤマ きさまーっ！

ハタヤマ、若い男につかみかかる。

逃れる若い男。

ハタヤマ ……。(息づかい荒く)

若い男 獣くさい……イノシシのにおいだ。

ハタヤマ ……おまえがそれを言うのか？ おまえがそれを言うのか!!

と、若い男はがれきの中に見えなくなっている。

ハタヤマ
……。

落ちていたボールを拾うと、
がれきにもたれ、眠りこむ。
その前に、つぶやく。

ハタヤマ
……キミがいるから大丈夫だよ……。

10. 停滞したものはやがて動き出す

添田家である。

男たち、女たちが、重い空気の中、或る者は立ち、或る者は座っている。

その中には、ほぼ全快の学もいる（ハタヤマのシャツを着ている）。添田、クボ、タナカ、道子、小池、鈴木、ミドリの方姿は見えない。

イド ……雪になるぞ。

ニシ うん……確かに冷える……。

テラカワ ここに、こーんな感じの、ちっちゃい棚があったんじゃないか？ な

あ、学くん。

学 ええ。

坂口 イノシシにやられたのよ。

テラカワ イノシシに？

坂口 そうよ。今さら聞くようなことじゃないでしょ？

テラカワ

いやオレは、あつたんじゃないかって言ってるだけだよ。

坂 口

聞いてたでしょ。学さんに、あれはどうなった？ って。

テラカワ

聞いてないだろ、そんなこと。

坂 口

そう？

テラカワ

(他の者に)なあ、オレ、聞いてないだろ？

他の者は、どうでもいいとでも言いたげに、さして反応もせず。

上 田

テラカワさんは、イノシシ擁護派だつてことですよ。

テラカワ

ちよつと待ってくれよ。なんでそうなるんだよ。

加 藤

目に涙うかべてたとか、自殺するつもりだとか、善良なイノシシ像こ

しらえてさ。

テラカワ

こしらえてねえよ。

越 智

安心したかったのよ、それで。ね、そうでしょ？

テラカワ

「うん」なんて言ったら、また矢が飛んでくるんだろ？

越 智

おっ、わかってらっしゃる。

テラカワ (怒って) オレは！ ここに！ 棚があつたなあつて思ったただけだ

よ！

青木 静かにしてよ！

テラカワ ……。

タナカ (入ってきて) あの子はどこに行ったの。ホラ、ミドリちゃんとかいう。

井本 そこらへん歩いてくるって。

タナカ あ、そ。

井本 何？ 寂しいの？

タナカ バーン！ (と、指鉄砲で井本を撃つ)

井本 大丈夫よ。これからずっと一緒だから。

学 サザンカの花を見に行ったんですよ。坂のところの赤いサザンカが見えたんで、ちよつと近くまで行ってみますって。

篠原 一人で？

学 そう、一人で。

篠原 一緒に行つてあげなくてよかったの？

学 (照れたように) いや、ま、サザンカみるだけだって言うから。

木島 なつかしいなんて言ってたわ。なまじ知らない場所でもないわけだし

ね。

学 なつかしい。ええ、そんな言い方してましたね……。 (なぜか体操めいたことする)

サカイ (ので) 学くん、もう動くね、体。

学 ハア。

サカイ よかった、よかった。

学 あ、お帰りなさい。

ここに、車椅子に乗った婦人(藤枝)をともなって添田とクボが戻ってくる。
それぞれに、お帰りなさいと迎える。

クボ 雪になるね。

イド (藤枝に) 寒かったですでしょう? どうぞどうぞ。ストープの方に。

越智 (藤枝に) 寒かったですでしょう?

藤枝 大丈夫よ。この人たちが歌をうたってくれたから。

イド　へえ、歌を？　どんな歌？

藤枝　寒さを忘れるには、やっぱりチューブでしょ。あと、昔なつかしい、

ビーチボーイズ？

ニシ　あ、藤枝さん、かましましたね。

藤枝　歌ってくれないのよ、恥ずかしいとか言って。そんなこと言い合ってるうちに体もあつたまってきた。ね。

クボ　ハハハ。

添田　……。

青木　どうだったんですか。

添田　（神妙に）うん……。

クボ　陳情書に対する回答を会社ぐるみで握りつぶしてるんじゃないかって藤枝さんが迫ってくださったんだ。

青木　そしたら？

クボ　そんなことはありません。

藤枝　ごめんなさいね。お役に立てなくて。

青木　とんでもありません。

加藤　ハタヤマさんのことは？

クボ だから、それでハタヤマさんは我々に合わせる顔がないって……それ
であんな嘘をついたんだらうって。これは私が、私が問いつめた。

上田 そしたら？

クボ 逆に強気になられちゃった。

中井 どういうことよ。

クボ ハタヤマさんのことは、向こうも捜してるし迷惑してるって。隠しごと
となんかないってことで強気になられたんだよ。

皆、何となく「……」。

添田は、黙って台所の方へ。

木島 なによ、添田さん。元氣ないじゃない。

木島、添田の方に行こうとするので。

藤枝 ほっときなさい。

木島 え？

藤 枝 歌もうたえないような人。

木 島 え？

ク ボ 怒られちゃったんだよ。

藤 枝 怒ったんじゃないわよ。

木 島 え？ え？ 二人とも歌はうたわなかったんでしょ？

ク ボ いやまあ、それは……。 (と藤枝を見る)

藤 枝 (ので) ……よおく見ておきなさいって言ったの。あなたはああなのよって。

木 島 え？

ク ボ その、何ていうのかな……向こうが……やっぱり会社だから、いろいろ守らなきゃならないじゃないですか。その正当化のあがきっていうかさ。

藤 枝 正当化の道しか見ようとしないうってことよ。おのれの非もちゃんと見ればいいのに……。

青 木 真佐子さんのこと？

ク ボ (うなづく)

藤 枝 男ってのは、どうしてああなの？ 正当化しか道はないの？

トクナガ
テラカワ

いや、添田さん、充分反省してると思いますよ。なあ。
うん。ずいぶん涙流してたし……（女たちの視線を感じて）いやまあ、
涙はアレだけど……。

学

……父は、許して欲しいってボクに言いました……母に対していい夫
であることが出来なかったということは、息子であるボクに対しても
いい父親であることが出来ないってことだって……だからボクは……。
（涙をぬぐう）

久保

学くん……。

学

……つらくあたったあとの父さんは、いつも寂しそうだった！ いつ
も小さく見えた！ どこにいればいいのかわからないって顔をして
た！ 全部父さんの愛情だってわかってるってボクは言った！ 愛情
って言っていていいだろ!? だってその先にあるのは、ボクたちを抱きし
めたいって思いにすぎなかったんだから！

藤枝

何時？

クボ

（腕時計を見せて）今、これです。

藤枝

え？ 裸眼で？

クボ

あ、えつと……3時15分です。

藤 枝 いけない、歯医者予約が。

ク ボ あ、じゃあ私が――。近藤歯科クリニックですよ。

藤 枝 あそこしかないから。帰還したばかりで、機材がまだちゃんとそろってませんが、おどかしとも言いつつかないこと言うのよ、あのオッサン。

ク ボ (他の者に) じゃあ、ちよつと。

行こうとした藤枝、振り返って。

藤 枝 学くとやら、いい子ね。御武運を！

ク ボ イノシシに襲われたんですけど、もうずいぶんよくなって――。

藤 枝 そんなこと聞いてない。

ク ボ あ……。

藤 枝 私は今より先しか見ないの。予約は4時よ。

ク ボ あ、じゃあ今より先に――。

藤 枝 いわゆる未来ね。

出ていった藤枝とクボ。

加藤 (久保に) 働いてるじゃない、御主人。

久保 うーん……前後よね、問題は。忙しく見える時がチャンスって考え方もあるのよ、男には。

添田が出てきている。

添田 (学に) バカだな……泣く奴があるか。

学、出てゆく。

添田 (誰にともなく) オレは、あんなこと言っていないよ……学の奴だって、あんなことは言っていない……。

井本 どうして素直に認めないの!? ヘラヘラ笑って! 誰だって学くんの言うことを信じるに決まってるでしょ!

添田 だって、言ってるねえもん。

井本 あきれた……。

平田 藤枝さんの前で言えた!? 今の言葉。言えなかったんでしょ。だから、今ごろのこのこ出てきて、何だ……その……そう! 正当化に走ろうとしてんでしょ!

添田 言ってねえつつつてんだろ!!

あまりの剣幕に、皆が「……」。

青木 (添田を諫めるように) ……わかったから……。

添田 バカヤロー! (と号泣)

上田 ……学くんの言っているとおりじゃない。

ニシ (なぐさめるように) 添田さん……真佐子さん、見てるよ……。

添田 (泣きながら) ……どっからでも見やがれつつうんだ……。

コイケ (急に) あれ!? うちのは? 女房の奴、どこに行った!? いねえじやん!

戸田 散歩よ、散歩。

コイケ 散歩?

戸田 そう、そう。鈴木さんと散歩。

コイケ 鈴木さんて誰だっけ……。

戸田 三ツ編みの人、いるでしょ？

コイケ 三ツ編み？

戸田 気持ちが三ツ編み。

「気持ちが三ツ編み」って言葉に、皆がヘラヘラ笑う。

ニシ まあ、仕事に出ないか？

イド そうだな……。

ニシ オレ、真佐子さんが早く線路を、出来あがった線路を見たいって言うてるような気がしてきたよ。なあ、添田さん！

イド オレたちが工事をつづけるってことはさ、オレたちのためだよ！線路が出来なきゃオレたち、帰ってきたって困るだけなんだから！

まだ全員がその言葉にのりきれない様子だが。

井本 まあ、ミドリちゃんも仲間になったことだしね……。

タナカ オレを見るなよ。

井本 見てないわよ。

越智 駅よ、駅。駅をつくらなきゃ。

イド だから線路だろ？

越智 ま、そうね。

イド 「ま、そうね。」って……。「ハイ、そうです。線路がなきゃ駅もあり

ません」てなんで言えないんだろうな……。

越智 るさいわね。いちいち。

テラカワ イドさん、敗けるから。言い合えば敗けるから。

越智 勝ちたかないわよ、別に。

ニシ オレ、何だかムズムズしてきたんだよ。体が……働かなきゃ、そうだ

ろ!?

青木 雪だ……雪が落ちてる……。

イド ホントだ……。

タナカ 今日は無理だな、工事は。

ニシ どうして？

タナカ 無理だろ、雪じゃ。

ニシ 関係ないだろ。雨も降りや雪だつて落ちてくるさ。

添田 (いきなり) ウォーッー! (と獣のような声を出す)

皆、その声に驚く。

添田 無理じゃねえよ、タナカさん!!

タナカ そ、添田さん……。

添田 オレたちに他にやることがあるのか! オレたちの町を復興させる以外にやることあるのか!?

タナカ いや、オレは「今日は……」つて言ったんだよ。

添田 何もちがわねえよ。今日も昨日も明日も! (つかんでる)

タナカ ちよつと離してくれよ。ヘルニアだよ! ヘルニアだつて!

添田 あ、ごめん……。

皆、笑う。

タナカ

笑いごっちゃねえよ！ 腰椎椎間板ヘルニアなんだよ！ みんなには内緒にしてたけど！

まだ笑ってる皆。「ホントかな」「適当な病名言ってるじゃねえの？」「なんで内緒にする必要があるの？」などと云ってる者もあり。

イド

(タナカに) 内緒にしなくていいんだよ。腰が痛いんだろ。

タナカ

うん。

内省的になった感のある添田のことを皆も感じてはいるが……。

坂口

……思い出すわね……真佐子さん、よくここに座って、こうやって、窓の外を見てた……「ちよつと休みましょ」とか言っちゃって。

篠原

「ちよつと休みましょ」言ってた、言ってた。

越智

タナカさん！

タナカ 何だよ！

越智 「ちよっと休みましょ」って、真佐子さんが！

タナカ 何が言いたいんだ！

井本 私、バンドエイドはってもらったことがあるのよ。

女たち （感に入って）あー、バンドエイド！

井本 ホラ、ここらへん片づける時、この親指んとこ金具でひっかいちゃつてさ。

西川 痛い、痛い、飛んでいけーって？

井本 ま、そんな感じかな。

根本 ちょっとナイチンゲールのなとこがあつたって話よね。

井本 ま、そんな感じかな。

根本 ……。

井本 うん、そんな感じよ……。

西川 まだ言う？

青木 真佐子さんてさあ……ある意味、チャレンジャーだった。そう思わない？

田宮 チャレンジャー。挑戦者ってことよね。

青木

そう、挑戦者……その「ちよつと休みましょ」にしたって、いわば行動に対する裏づけの時間でしょ。停滞したものの中にある方向性も定かではないわれわれの衝動の見きわめの時間よ。ちよつと難しい？
表現が。

上田

いやいや、つづけて。

青木

「飲みに行こうぜ」ってのとは、ちよつと違うって話よ。

タナカ

ホラみろ。オレのことじゃねえか。

青木

言うかもしれないのよ。言うかもしれないの「飲みに行こうぜ」って！ でもそれは或る意味、行動でもあるわけじゃない……つまりその前の時間よ。

タナカ

オレのことじゃねえの？

青木

私たちは、往々にして、行動することが、行動することこそがチャレンジだっと思うわけよね。行く手を阻むものをぶち破って進むっていうさ……その方向性の定まった闘い以前に、私たちには、どこに向かえばいいのかわからないっていう、荒れ狂う衝動があった——ううん、あるはずよね、この胸の奥にさ。そのことに価値を与えるべきだっということよ。その時間をないがしろにしようとするものへのあくなきチャ

レンジよ。

上田 「ちよっと休みましょう」が？

青木 そう、そう。

青木の意見に対するざわめき。

「よくわかんねえけど、わかるような気がする」など……。

野口 そうか……真佐子さんは、身をもってそのことを教えたってことね。

だって、添田さん、しばらく工事休んでたんだから。

……。

青木 そうでしょう!?

野口 真佐子さんのことを思えば、ここで私が軽はずみな返事をするわけにもいかないわね。

青木 勝手なこと言いやがって……。

添田 ホラ、添田さん、あんなこと言ってるし……。

青木 ニシ 行こう！ オレはもう行くよ！

タナカ うん……雪、大丈夫だ。これくらいなら……。

ここに、鈴木と小池が手をつないで来る。

木島　なに、手つないで。

小池　だって、この人が手つなぎましようって言うんだもん。

鈴木　合意の上よ。

小池　もういいんじゃない？　ある程度、説明出来たと思うし。

鈴木　そうね。

手を離す二人。

添田は寝室の方に、人知れず行った。

コイケ　なんでここにいてるってわかったんだ。

小池　え？

コイケ　なんでここにみんないるってわかったんだって！

小池　なんでそんな言い方されなきゃならないの？

鈴木　会ったのよ、学くん……私たちがミドリちゃんをさらっていったわ。

篠原 え、なにそれ。

鈴木 私たちはまずミドリちゃんに会ったの……ね。

小池 うん、それで、こう向いてた矢印が（と自分と鈴木の間を示して）、
こう向いて（と二人の方からミドリに向かったことを示し）、この
矢印は（と二人の間のこと）なんか、どうでもよくなったって、そんな
流れよ。

鈴木 で三人で歩いてたら、学くんに出会った……そういうこと。

沼田 さらにいったの？ ミドリちゃんを。

鈴木 と言ってもいいわね。あれは……なんか不穏なものを感じた、私。あ
なたは？

小池 わかんない。

鈴木 そんなこと言って、私だけをワイドショーの前に置き去りにするつも
りね。

小池 もうイヤ！ この人、こんなことばかり言うから！

サカイ ミドリちゃんて誰だっけ。

タナカ 東京からアレだよ、恋人とアレでさ。

サカイ ああ、そうだったな。

コイケ わかったのかよ。

ニシ オレは行くよ！ イドさん！ 行こう。

イド うん。

トクナガ オレも行く。みんな、行こうぜ！

男たち、すでにためらう者もなく、出て行こうとして。

テラカワ あれ、添田さんは？

その時、寝室の方からチーンという音。

皆、添田が真佐子の霊前に手を合わせているのを見た。

全員 ……。

青木 (男たちに) すぐに追いかけるから。

男たち、うなずいて、出てゆく。

坂口 ……今日はここに帰ってくるのよね、男たちは。
寺島 ……だから、こちらへん、片づけといた方がいいわよね。
長谷川 さっそく始めましょうよ、私たちも。

添田、出てくる。

添田 あれ、みんなは？
木島 行ったわ。
添田 仕事にか？
木島 あたりまえよ。
添田 何だよ……。

追おうとする添田。

坂口 添田さん！ ここつかつていいのよね。
添田 え？
坂口 だから、みんな今日の仕事が終わったら。

添田 いちいち聞くなよ、そんなこと！
坂口 まあ……。

添田、出てゆく。

女たち、あの強情っぱりが、という風に肩をひそめ合う。

越智 だけどさあ……あいつら、ハタヤマさんのこと一言も言わなくなった

でしょ。なんか、こわくない？

私もそれ、感じてた。

でしょ？ 実際のところはどうかなのよ？

何が？

越智 だから、私たちを見捨てたとか言っすぎて憎んでるんじゃない？

口に出さない分さ。

青木 それもあったと思うのよ。藤枝さんがわざわざ一緒に向こうに出向いて下さったのには。

篠原 ん？ それは？

青木 私たちがハタヤマさんを憎むスジ合いがあるものかどうか、ちゃんと

見てごらんさといってことよ……陳情書に対する回答があったかどうかってことは、たぶん、どうでもいいと思ってるっしょったのよ。

他の者も「ハア」とうなずいたり。

青木

第一、近藤歯科クリニック、まだ再開してないでしょ。だって昨日、息子夫婦が看板とりつけてたんだから。

土屋

藤枝さんてば！

越智

……どこに行ったんだろ、ハタヤマさん。

加藤

そうよね……。

それぞれの思いに、皆立ち尽くしているが。

坂口

片づけない？

木島

そうね。そうね。

皆、片付けを始める。

青木 私、ちょっといい？

青木、出てゆく。

井本 どこ行ったのかしら。

久保 道子さん、捜しに行ったんだと思うわ。

井本 道子さん……なんで。

久保 あの女、ハタヤマさんの居場所を知ってるかもしれないって言うって
から。

加藤 あの女って言うってたの？ 道子さんのことを。青木さんが。

久保 私の耳はそう聞いたわ。

11. 丘の上の二人

学とミドリが丘への道をのぼっている。

学 女の人たちは特にうるさいけど、みんないい人たちなんだ。

ミドリ フフ、わかるわ。

学 声だけ聞いてるといつもケンカしてるみたいなんだけど、そうでもないんだよ。

ミドリ でも時々、ホントにケンカしてる？

学 ハハハ……ありうる！ ありうるよ、それは。するどいなあ、ミドリさんは！

ミドリ あっ……。 (とつまずいた)

学 あっ……。大丈夫？

ミドリ 大丈夫。

学 ここんとこに、こんなでつぱりが……。

ミドリ (照れたように) バチがあたったかな……。

学 バチ？ 何が？ 何の？

ミドリ

ホントにケンカしてるなんて言ったから。

学

まさか、まさか。ボクなんか今、あれ？ あの時は、あれ？ あの時は……って、思い返してたんだから。自分の人間観察の甘さを戒めるような気持ちでさ、フフフ……。

ミドリ

(眼下を見ている) ……！

丘の上に来たのだ。

学はミドリの横顔を見た。

学

ふーっ……何だか……！

ミドリ

……。 (ただ海の方を見ている)

学

子供の頃からボクはこの海を見て育ったんだ……釣りもしたよ、ホラ、あの堤防のあたり！ 沖合から戻った漁師さんたちにちっちゃい魚をわけてもらって、「こんなに釣れたんだよ」って家に持って帰ったこともあったな。ハハハ……ヒラメ、アイナメ、春にはハゼとかカレイとか……あの頃の釣り仲間の矢部って奴は今、海洋調査チームを組んで、魚たちの汚染状況を調べてる……もう大人になってるから沖合ま

でてね……ツブ貝、ホッキ貝、エビ、カニ、イカ、タコ、メヒカリ、キンキ。それから、イワシもサバも！ 出荷制限に基準値というものがあつてね。でもそれは自分たちで確かめないと、誰かに言われて、ハイそうですかってわけには——。(ミドリを見た)

ミドリ

(涙を流していた)

学

……。

ミドリ

ごめんなさい……。 (涙を拭う)

学

あのう……あれ……ええつと……あ、そうだ、これ。(とハンカチを

差し出す)

ミドリ

ううん、大丈夫。

ミドリは自分のハンカチを出して——。

学は、自分のハンカチをしまいかねて。

学

(自分のハンカチのことを) これは母が……おふくろが、駅の売店で買ってくれたんだ……さっきのその海洋調査の矢部と専門家に会うために東京に行く時……「男の子だってハンカチぐらいは持つてるもの

よ」とか言って……ボクが汗をこう、手で拭いてたんだな……。

ミドリ (少し笑おうとして) いいお母様ね……。

学 うん……ちよつと世話の焼きすぎって感じもなくはなかったけど……。
そんなことないわよ。私だって買ってあげたくなるわ。自分の子供が
手で汗をぬぐってたら。

学 ああ、そうか……でもボクは、こう、ワイルドに手で汗をさ……男の
子だし……。

ミドリ 学さん、変！

学 わっ……そうきたか……ハハ……。

ミドリ、先に降りていこうとする。

学 (ので) え？ だって…… (と眼下を指さし、まだちゃんと見てない
と) ……いいの？ ……もう。

ミドリ 行こう、もう……寒くなってきたし。(とさらに降りて行こうとし
た)

学 (そのミドリに) 思い出させてしまった？

ミドリ 何を？

学 ……。

ミドリ え？ 何を？

学 聞いたんだよ。恋人を捜すために東京から来たんだって。

ミドリ ……。

学 そうだろ？ だからボクは……。

ミドリ 学さん……今はちがうの……。

学 ちがうって？

ミドリ 私は私の道を歩かなければって、そう思ってるの。思うようになったの。この町に来て。

学 どういうこと？

ミドリ あの人はきつと自分の道を見つけたのよ……自分の歩くべき道を……この町の誰かのために、誰かが住むこの町のために歩くべき道……私にもそれが見えるような気がする……ならば私は、この私は、あの人が見ているこの町を見なければ、あの人を捜しだす前に、この町をちゃんと見なければって……今はそう思ってるの……。

学 (なぜかハンカチをミドリの方に差し出している) ……。

ミドリ (ので) 学さん……それ、もうしまつて。

学 あ……。 (気づいてポケットに入れる)

ミドリ 戻りましょう、みんなのところへ！

学 うん！

二人、歩き出すと、

男たちの歌声が聞こえる。

ミドリ あ……。

咄嗟に身を隠すミドリ。

学 え？

つられて隠れた学。だが、いた場所のせいで、ミドリとはちがう所に隠れることになった。
男たちが来た。

イド　　みる、雪だつて、おそれをなして、落ちてくるのをやめやがった！

ニシ　　ハタヤマのヤロー、見つけたら、たたじゃおかねえぞ！

サカイ　そっち来たか。

ナカガワ　こわいよニシさん！

ニシ　　サッカーだつて点が入らなきゃ、ただのジャレ合いだ。そうだろ？

テラカワの息子　だからつて、ポンポン点が入るサッカーも、或る意味、ジャレ合いやねえか？

ニシ　　一点の重み、それをオレたちや知つてゐるつて話さ。だから言つてんだよ、ゴールは目の前なのに、パスをよこさねえハタヤマはただじゃおかねえつて。

タナカ　たのむぜ、センタリング！

ニシ　　トクちゃん、キーパー、そっちに引きつけといてくれよ！

トクナガ　あんた蹴るのかよ、ニシさん！

ニシ　　ああ、振り向きざまのボレーシュートだ！

テラカワ　何の話だよ！

クボ　　（テラカワに）よく言つた！　このままじゃオレたち、国立競技場まで行つちまう！

笑う男たち。

薄く見えるイノシシの影。

サカイ 見ろ、イノシシだ……。

コイケ ホントだ、線路の中に……。

サカイ 柵をのりこえてきたのか？

ナカガワ 柵をこわしやがったんじゃないのか。

ゆっくり歩いて去るイノシシ。

テラカワ 見てたぞ、オレたちを……自分のことを言われてるってわかって……。

男たち、イノシシを追って――。

イド どこに行くつもりだ……!?

男たちの姿も見えなくなると、学が出てくる。

そしてミドリが隠れたところに行くが、その姿が見あたらない。

学 え……ミドリさん……ミドリさん！

添田が来る。

添田 学……。

学 あ……父さん。

添田 何をしてるんだ。こんなところで。

学 いや……。

互いに何か言いたそうだが……。

添田 行くから……。

学 うん……。

添田 (行こうとした)

学 あ、今……。

添田 何？

学 今、イノシシが出たって……。

添田 そうか……。

学 うん……。

添田 ……。

学 みんな元気そうだった。寒いのに。

添田 意外に似合ってたな。(と学の着ている服のこと)

学 あ、これ？ これはハタヤマさんが……。

添田 うん……だから、意外に……言ってるんだ。

学 ああ……あ、オレね——。

何か言おうとしたが、添田は行く手の方を見ていた。

そっちから「こっちだ」「振り向いた！」「気をつけろ！」

などの声が聞こえたのだ。

添田 (それに反応して) 行くわ。

添田、走ってゆく。

学

……何を言おうとしたんだっけな……（まわりを見まわして）何を言おうとしてたんだっけなーッ!!

ミドリのあとを追うように走り去る学。

誰もいなくなったそこに、

再びミドリがあらわれて、一人で、

丘への坂をのぼり始めると、

上から道子が降りてくる。

ミドリ あ……。

道子 何を確かめたくて？

ミドリ ……。

道子 一人で読んでみたくて？ 日記を、木の幹に刻まれた……。

ミドリ あの人は、今どこに？

道子 ……。

ミドリ 御存知なんでしょう？

ミドリをかわして下りて行こうとする道子。

ミドリ 会ったんです。真佐子さんという人に……ええ、添田真佐子って言った。その人は。

道子 ……（振り向いて）どこで？

ミドリ 駅で……更地のままの……（思い出すように）……パエリア……パエリアをつくったってその人は言った……（そして、丘の上を指さして）……パエリアを食べたって……あの木の幹に。

道子 死んでいるのよ、真佐さんは。

ミドリ 死んでる……？

道子 待っていたのよ、あなたのことを。真佐さんは……たぶんハタヤマさんのために。

ミドリ ハタヤマさん……（少し笑って）ハタヤマさん……（急に）え、どうして!? どうして亡くなったんですか、真佐さんは！

道子 ……。

ミドリ どこで!? あの駅で!?

道子 納屋よ。納屋で首をつつたの……。

ミドリ (自分の首をさわる) ……。

いつしかそこに、青木が来ていて。

青木 あら……さっき学くんと会った……ミドリさんを見なかったかって聞

かれたの。

ミドリ、しばし、さまよい、行くべき方向を見ると、小走り
に去る。

青木 どういうこと? こんなところで二人。

道子 うまく説明出来そうもないわ。

しばし二人、話すこともない風であるが。

青木 男たちは働きに出たわ。

道子 そう……。

青木 ……。

道子 知らないわよ。ハタヤマさんがどこにいるかなんて。

青木 ……。

道子 そのことでしょ、聞きたいのは。

互いに牽制してるようで。

青木 ……こう思ってたのよ私……あなたが二人のことを、真佐子さんとハ

タヤマさんのことを、添田さんに教えたんじゃないのかって。だってあなたが一番二人のことを知ってるって思ってたから。

道子 教えた……何のために？

青木 つまり、あなたもハタヤマさんのことが好きだったんじゃないかって。

道子 (何か言おうとする)

青木 (のを) ううん！ 今はちがうの。今はそういう風には思っていないの

よ。むしろそう思った自分を恥じてるくらいよ……でも、そう思わな

いと説明がつかないようなことだったの。真佐子さんのことは。

とんだ告白ね……で、今は？

今……。

道子 だって私が真佐子さんを殺した。そう思ってたってことでしょ？
で、今は？ 今はどう思ってるのよ！

青木 あの子（とミドリが行った方を示して）のことを知った時、あの子が
捜しているのが、他ならぬハタヤマさんだってことを私が知った今
……真佐子さんを追いつめたのは、むしろあの子の存在ではなかった
のかと私は思ってる。

道子 それだけ？ それだけかしら、真佐子さんを追いつめたのは。

青木 もちろん、それがすべてだとは思わない。

道子 ならば、私たちは同じ意見ね。

青木 ……。

道子 正直に言うわ。私は応援してた。真佐子さんとハタヤマさんのこと
を！ 二人の恋を！ 間近で見てたからよ！ 二人がどんなに支え合
ってるかってことをいつも間近で見ていたから！

青木 ハタヤマさんもそうだったの？ ハタヤマさんも色をなくしてたの？

道子 ……。

青木 愚劣な質問ね。

道子 愚劣でもないわ。もしハタヤマさんがホントウには色をなくしていなかったとすれば……だけど、ホントウのことが誰にわかるっていうのよ……そうでしょう？

青木 ……。

道子 まだ知りたいことがあるって顔してる……フフ。

青木 あなたが知っていて私が知らないことがあるとすれば、とても不公平なことだと思えてしまうの……なぜだかわからないけど……。

道子 それで私にカマをかけてみた？

青木 ……。

道子 私が二人のことを添田さんに告げ口したんじゃないかってことよ。

青木 誤解よ。何を言ってるの。

道子 わかる？ 私が今何を思ってるか。あなたは真佐子さんのことをうらやんでいただけじゃないのかってことよ。

青木 うらやんでた？

道子 そう！ つまり、あなたも、あなた自身のために、ハタヤマさんにか

青木 わる誰かが欲しかった。そういうこと！

道子 (笑って) そんなことはないわ。

青木 だからってあなたのことを責めようとしてるんじゃないわ。私が知っていてあなたが知らないことってのは、つまりそれじゃないの？

道子 それって？

青木 私たちは、真佐子さんをうらやんでいたということよ。二人とも！

道子 青木は、気持ちを整理出来ない様子で歩く。

青木 私たちは私たちにこんな被害をもたらしたハタヤマさんやその会社の人たちを憎もうとした……でもあの人は、真佐子さんは、許そうとした……だから私たちはうらやんだ、あの人を。

道子 許そうとした……。

青木 そうじゃないの？

道子 許せなかったってことじゃないの？ 私たち以上に。

青木 どうしてよ。

道子 だからハタヤマさんを迎え入れ、ハタヤマさんをまつりあげること

前に進もうとする私たちに苛立ったのよ。そんな私たちのこともまた許せなかった……。

道子
……。

青木 うらやんでた……（少し笑って）うらやんでた……！（顔をおおって泣く）

丘の上にイノシシが見える。

それに気づいた道子。

道子
イノシシ……！

丘の上っていこうとすると、

歩き去ったイノシシ。

青木 道子さん！

道子 ……あなたがいたから走馬灯を見ずにすんだ……。
青木 フフフ……。

道子 見たのよ、ホントに。
青木 嘘だなんて言っていないわ。

二人、丘の上まで行くと。

道子 (イノシシの方を見て) また穴を掘ってる……。
青木 あんなにかわいいのに……!!
道子 やだ、こっちを見た!

思わず青木の腕にすがった道子。
それを丘の下から見えていた久保。

久保 何よ……なんで仲良さそうなの? あの二人……。

身を隠しつつ丘を上ってゆく久保。

12・納屋

薄暗い納屋の中に

月の光が漏れている。

ミドリがそこに入ってくる。

突然、そのミドリを見おろすように、
首を吊った死体（真佐子の）が見えてくる。

が、ミドリは気づかない。

ふと、気配を感じて振り返るミドリ。

と、もう死体はない。

ミドリ
……。

入ってくる人の気配に身を隠すミドリ。
入ってきた若い男。

若い男
……どいっ？

ミドリが出て行こうとした時。

声　　ここよ。

ミドリ　!?

若い男が声に引かれ、見えなくなると、
入れかわるように真佐子が、少し足を引きずりながら出てく
る。

ミドリ、隠れる。

真佐子　（言い訳のよう）　つまずいてしまったの、そこで、さつき……。

若い男も出てくる。

真佐子　何よ、変な顔して。

若い男　（自分の顔を触って）　そうかな……。　

真佐子　言ってみて、「いけない人だなあ」って。

若い男 ……。(照れたような)

真佐子 言ってくれたでしょ。あなたの指を噛んだ時よ、この口で。

若い男 あれは……。

真佐子 あれは？

若い男 痛くしたからだ、ボクのことを。

真佐子、手招きする。

近づいてゆく若い男。

真佐子はその手をつかんで口に持っていこうとするので、手をひっこめる若い男。

真佐子 (悲しんでる風) ……。

若い男 (なので) ……ちよつとだけだよ。

真佐子 (差し出された指を見る) ……。

若い男 ちよつとだけだからね。

真佐子は言いつけに従ったように、ゆっくり若い男の手をと

ると、思いつきり噛む。

若い男

！（痛いと言いたいが耐えて）

真佐子は若い男の手を離すと、

息づかい荒く、若い男をにらんでいる。

真佐子

……言いつけに従ったのよ。あなたを憎むべきだって。

若い男

だからって、これは……。

真佐子

なあに？

若い男

痛すぎるよ！

真佐子

（敗けじと）私だって痛かった！

若い男

何が？

真佐子

歯が！折れてしまって歯っかけバアさんになりそう！ホラ、もう

なった！（歯っかけバアさんで）むかしのしゃんをみせとくれ、むかしのしゃんをみせとくれ。

ドンドンドンと扉をたたく音。

若い男 (扉のところへ行つて) イノシシだ……ん? どこへ行った……。

真佐子 ……。

若い男 (少し笑つて) 昔の写真…… (真佐子に自分の全身を見せるようにして) ホラ、昔の写真だ……こうやって笑えば、あんなにしあわせだった時つてことになるのさ。

真佐子 (若い男を見ている) ……もう、今には戻れないの? 私たち。

若い男 ……。

真佐子 ……ここは、どこ??

若い男 何を言つてるんだ。納屋じゃないか。あなたの家の納屋だろ。

真佐子 そうか……さっき、ここにつまづいたんだ……つまづいた時、なれない所を歩いてるようよつて自分に言つたんだつた。

若い男 ……。

真佐子 暗い……暗すぎるわ……どうしよう! あなたのことが影にしか見えない!

またドンドンと扉をたたく音。

真佐子

どこよ!! 今はどこ!! はっきり見えるはずでしょ!? あなたのことが! 今が昔でなければ!

若い男

真佐子さん!

真佐子

影が口をきく……(ドンドンという音で扉の近くまで行き) ああ、嫌われもののイノシシ……わかってるわ。穴を掘るのね。私たちにシエルトーを用意するために。

不意に見えてくる真佐子の首吊り死体。

若い男

(それを見て)!

近づいてゆく。

ミドリがあらわれる。

そのミドリに気づいた若い男——すでにハタヤマ。

見つめ合ったミドリとハタヤマ。

ミドリ
ギイ……！

ハタヤマ
ジェニー……！

真佐子の気配はない。

ハタヤマは、むしろミドリから遠ざかろうとした。

ミドリ
ハタヤマさん！

ハタヤマ
――。（止まり、振り向く）

あなたの口から聞きたかった……でも知ってしまったから。

ハタヤマ
……。

ミドリ
私もまた古い写真？

ハタヤマ
待ち遠しかった……四月になるのが……ボクはあの前の年の十月、就

職を決めた……そのことをキミに伝えたかった……でも四月まで待とう、そう思った……待てばその分、二人の喜びは大きくなるって思え

たんだ……だから正月に東京で会った時、ボクはしばらくはアルバイトで食いつなぐかもしれないって、嘘を言った……。

ミドリ
聞かないの？ 私の名前。

ハタヤマ そうか……キミは知ってしまったんだものな……え……名前は？

ミドリ ミドリ。

ハタヤマ ミドリ……！

ミドリ おぼえやすいように、緑色の服を着ているのよ。

しかし服は緑色ではない。

ハタヤマ そうか……キミらしいや……緑色なんだ……。

ミドリ (衝撃を受けて) ……。

ハタヤマ (笑って) おぼえやすいように……おぼえられるよ。キミの名前だもの。

いきなり、ハタヤマの胸に飛びこむミドリ。

ミドリ ギイ………！

ハタヤマ ……。

ミドリ 呼べないわ、ハタヤマさんだなんて。

ハタヤマ

ボクたちは何を待っていたのかな、あの頃……お互いのホントウのことを知らないようにして……ボクたちの「今」がこわかったのかな……。

ミドリ

何も言わないで、ギイ。ねえ、座りましょう。ねえ、座りましょう。

座る二人。

ミドリ

ええ。待っていたわ、私たちは。

ハタヤマ

今は……（ミドリの手に、顔に触れて）……今だな……。

ミドリ

聞こえる？ 私たちの駅が出来ていく音。

ハタヤマ

……。

ミドリ

あなたが働いてきた証しよ……あなたは働いてきたの。帰ってくる私たちのために……私たちの「今」のために……少しでも休めばいいわ。私の腕の中で……。

ハタヤマは眠ってしまったようだ。

ミドリ

駅が出来ていくわ……私たちの駅……約束の四月になる……私たちは駅へ向かう。満開の桜の下を歩いて……私たちは、そうだな……きつと何も言わず、ただ歩いてる……駅があるから……そこに向かっているってわかっているから……で、そう！ 列車の音が聞こえてくると、私たちは走り出す。「キミのせいだ」「あなたのせいよ」と言い合いながら。フフフ……でも今は……そうね、今は、少しだけ眠りましょう。

二人は眠った。

やがて、入ってきた学。

学

……（眠っている二人を見て）……。

着ていた服（ハタヤマのもの）を脱いで二人に掛けてあげる。

学

……おかしいよ、こんなの……おかしいだろ……。 （と掛けた服をとりあげ、それで顔をおおい、うずくまってしまう）

真佐子の声

学……。

学は、声をさがす。

真佐子の声

学……。

学

母さん……！！

学はその母の声におびえたように、
再び服を二人に掛け、あとずさり、
納屋を出てゆく。

丘へ上ってゆく学が見える……。
と、列車の走る音が聞こえてくる。

学

(眼下を見て) ……走ってる……線路の上を……！！

13 線路

納屋に朝日が射してきた。
目覚めたミドリ。
すでに高齢になっている。

(ミドリ)
ハタヤマさん……。

目覚めるハタヤマ。
もまた高齢になっている。

(ハタヤマ)
ああ……夢をみていた……。

(ミドリ)
どんな？

(ハタヤマ)
駅に歩いていた……。

(ミドリ)
二人で？

(ハタヤマ)
ああ。

(ミドリ)
もしかして走り出さなかった？ 私たち。

(ハタヤマ)

……。

(ミドリ)

列車の音が聞こえてきたからよ！

見えてくる線路。

その脇には満開の桜並木が――。

その下を大ぜいの人たちが歩いている。

実際に列車の音が聞こえてくる。

(ミドリ)

走りましょう！

(ハタヤマ)の手をとって走り出そうとした時、二人は、歩いてくる人たちの中に、自分たちの姿を見た。

(ミドリ)

見て。

(ハタヤマ)

誰だ、あれは。

(ミドリ)

私たちよ。

まぎれもなく若い二人だ。

若いハタヤマは《薄い桃色のかたまり》を見ていた。
すれちがった彼ら。

(ミドリ)

どこに行くのかしら？

若い二人は、高齢のハタヤマとミドリを見た――。

了